



旧戸島家住宅は、柳川藩で中老職の要職に就いていた吉田兼儔の隠居後の住処として庭園と共に建築した葦葺二階建ての建物で、後に藩主の立花家に献上された御茶屋として使われたといわれている。維新の頃に藩兵の訓練所として徴発された宅地の代償として立花家から由布氏に下賜され、明治15（1882）年頃に由布氏の転居に伴い戸島家の所有となった。その後は主に住宅として使用されたが、柳川地方の武家住宅の典型例として福岡県の文化財に指定された。数寄屋風の意匠を持つ葦葺屋根の建物と掘割の水を引き入れた池を持つ庭園がつくる静かで落ち着いた趣ある空間が見事である。



見どころ



桜と鳩としじゅうからが描かれた杉戸絵。仏間の棚の扉には張謂の漢詩が彫られ、扉の両側に竹で箕状に編んだ枠。茶室や座敷には竹柱、竹の落とし掛、竹の違い棚など竹を主題意匠として使われている。

入側（東）



仏間東面



座敷西面

屋根は、東面南半分と南面が葦、目板葺、杉板葺の三段。茶室庇屋根と桁間の壁は竹網壁で竹の意匠を強調。



式台

三日月の竹下地窓、竹の欄間など江戸後期の流行を反映して、随所に文人趣味の意匠がみられる。

建物名称	旧戸島家住宅
建築年	1828（文政11）年
構造・様式	木造、入母屋、葦葺
所在地	福岡県柳川市鬼童町49-3
電話	0944-73-9587
H P	https://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/rekishibunka/s_hisetsu/toshimake/shisetsu_toshimake.html
開館時間	9:00～17:00入館16:30まで 火曜休館（詳細H P参照）
アクセス	西鉄バス「御花前」バス停下車徒歩2分
備考	福岡県指定文化財・庭園は国指定名勝

旧木下家住宅（堺屋）

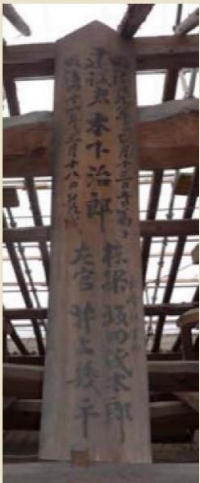
福岡県八女市

きゅうきのしたけじゅうたく（さかいや）



木下家は、江戸期初期から始まり「堺屋（さかいや）」の屋号で、代々酒造業を営み、大きく栄えた商家である。現在、離れ座敷、土蔵、倉庫が保存されている。「離れ座敷」の妻壁には「一富士、二鷹、三茄子」のめでたい鍔飾りが施され、内部では黒柿の床柱、屋久杉の一枚板で造られた欄間など贅沢な造りとなっている。屋根裏の棟札には明治39（1906）年旧暦1月31日に建設に着手、明治41（1908）年旧暦3月18日完成、建設に係る大工棟梁は長峰村吉田（現八女市吉田）の坂田茂太郎、左官は井上幾平と記されている。往時は貴賓客のための応接や宿泊などに使われていた。この離れ座敷の建設前に乃木希典大将が宿泊した記録が残っている。

見どころ



新奇的意匠で飾られた座敷では折り上げ天井、一富士二鷹三茄子の意匠。手洗所と小便所床面の植物文様の磁器タイルなど様々な発見を楽しむ事ができる。



座敷南面の庭園には水琴窟があり、庭を囲む土塀の開口部には扇形を採り入れ、意匠の細部に気概が感じられる。

建物名称	旧木下家住宅（堺屋）
建築年	1908（明治41）年
構造・様式	木造、入母屋、棧瓦葺
所在地	福岡県八女市本町184
電話	0943-23-7611
H	P http://www.city.yame.fukuoka.jp/soshiki/4/6/2/33/1454652066042.html
開館時間	10:00～17:00 月曜休館（詳細HP参照）
アクセス	西鉄、堀川バス「福島」バス停下車徒歩12分 駐車場有
備考	八女市指定文化財



旧伊藤伝右衛門邸

福岡県飯塚市

きゅういとうでんえもんてい



筑豊の著名な炭鉱経営者であった伊藤伝右衛門の本邸として明治30年代後半に建造。大正初期、昭和初期に数度の増改築がおこなわれた。高い塀は旧長崎街道に面しており、1927（昭和2）年に福岡市天神町にあった別邸（通称銅御殿）から移築された長屋門や伊藤商店の事務所が目目を引く。邸宅は南棟（正面）北棟（庭側）、両者を結ぶ角之間・中之間棟、玄関・食堂棟、繋棟の家屋5棟と土蔵3棟からなり、池を配した広大な回遊式庭園を持つ近代和風住宅である。和洋折衷の調和のとれた美しさ、当時先進的だった建築技術や繊細で優美な装飾を随所に見ることができる。柳原華子（白蓮）が伝右衛門の妻として約10年過ごしたゆかりの地で、伝右衛門や白蓮に思いをはせる場でもある。

見どころ



アールヌーヴォー調のマントルピース、イギリス製のひし形のステンドグラスのある応接間、一畳たみを敷き詰めた長い廊下等、様々な芸術的技法を取り入れた、繊細で優美な装飾を随所に見ることができる。

入側（東）



庭園は導入部の馬車廻しを中心とする広場をはじめ、建築群に挟まれた中庭の部分、敷地北半分を占める大規模な主庭の3つの部分から構成される。特に主庭は、流れ及び2つの池泉の背後に緩やかに盛り上がる築山などから成り、主屋からの展望を意図した庭園であるとともに、様々な景を楽しむことができる回遊式庭園でもある。池泉に架かる石造の太鼓橋、2基の石造噴水、敷地の西北隅に立つ石塔、随所に据えられた様々な形式の石燈籠、築山の頂部に建つ茅葺八角形屋根の四阿など、近代の回遊式庭園として十分な質と量を誇る庭園景物が見られる。



建物名称	旧伊藤伝右衛門邸
建築年	明治30年代後半
構造・様式	木造、入母屋、瓦葺
所在地	福岡県飯塚市幸袋300
電話	0948-22-9700
H	P http://www.city.iizuka.lg.jp/shokokanko/kyoiku/leisure/kanko/dennemon/index.html
開館時間	9:30~17:00 水曜休館（詳細HP参照）
アクセス	JRバス「幸袋本町」バス停下車徒歩2分 駐車場有
備考	重要文化財(建造物)・名勝指定 写真：飯塚市

旧丸林本家北棟「うなぎの寝床」

福岡県八女市

きゅうまるばやしほんけきたとう「うなぎのねどこ」



旧丸林本家は、八女福島伝統的建造物群保存地区内にある町家である。主屋3棟（北棟、中棟、南棟）からなり、明治初期～後期にかけて建築された。大正期に伝統産業である八女提灯製造業と、その住居として使われるようになった。空き家となり約30年、取り壊しの危機にあったが、2006（平成18）年有志の市民が、本家に特化した団体「八女福島丸林本家保存機構」を立ち上げ、市の補助金に加え、会員からの借入金によって修理工事費を調達した。現在、北棟は商店「うなぎの寝床」、中棟は泊まれる町家、南棟は個人宅として賃貸され、家賃収入から借入金を返済しながら運営している。「うなぎの寝床」は九州・筑後地方の手仕事のものづくりを伝えるアンテナショップであり、店のコンセプトと町家が見事に調和している。

見どころ

北棟は「居蔵（いぐら）」と呼ばれる妻入り入母屋造の大壁塗込造りで前下屋と左右に袖下屋を持つ。中棟は平入り切妻、前下屋付き、南棟は妻入り入母屋造で前下屋付きと3棟が少しずつ違いのある造りとなっており、これが八女福島の変化のある町並みを創り出している。



旧丸林本家3棟外観（右から北棟、中棟、南棟）



袖下屋



鬼瓦



うなぎの寝床 店内*



蔀戸

昭和初期、1955（昭和30）年の道路拡幅により、前下屋は軒切りがなされ改変されていたが、柱筋に残る痕跡を元に蔀戸や大戸が復元された。開店時、蔀戸、大戸が開かれ、のれんがかかると町に店舗の賑わいが広がり、魅力的な景色を生み出している。

建物名称	旧丸林本家北棟「うなぎの寝床」
建築年	明治後期
構造・様式	木造二階建 棧瓦葺正面入母屋造 背面切妻造
所在地	福岡県八女市本町267
電話	0943-22-3699
H P	http://unagino-nedoko.net/
開館時間	11:30～18:00（火、水定休日）
アクセス	西鉄バス「西唐人町」下車 徒歩12分、駐車場有
備考	八女福島伝統的建造物群保存地区内 *写真：うなぎの寝床

旧柳川藩主立花邸 御花

福岡県柳川市

きゅうやながわはんしゅたちばなてい おはな



旧柳川藩主立花家別邸は、5代藩主、立花貞淑（さだよし）により、1738（元文3）年、二の丸御殿から奥の機能を柳川城の南西隅に移したのが始まりとされている。14代当主、寛治（ともはる）によって、1910（明治43）年に建設された西洋館、大広間、御居間、家政局、松濤園、門番詰所が現在に残り、これらを含む敷地全体が国の名勝に指定されている。現在でも立花家が所有し、1950（昭和25）年からは、結婚披露宴会場、レストラン、ホテルとして活用されている。柳川市は「水郷のまち」とも言われ、御花も堀に囲まれている。川下りで着いた船が着岸できる船着場門もあり、新郎新婦を乗せた「花嫁船」も名物の一つとなっている。

見どころ

立花家の迎賓館として建てられた西洋館は、鹿鳴館の流れをくむ建物で、ギリシャ神殿風の柱や、天井の装飾など、華やかな意匠が目を引く。すべての部屋で異なった装飾がされている点も注目される。シャンデリア（当時のまま）は、自家発電によって点灯していた。



西洋館外観



階段室



大広間



約100畳の大広間は、前後に床を持ち、分割しても床を持つ造りとなっている。また、畳を外すと能舞台として利用することもできる。縁側には立花家に代々伝わる金の兜が並ぶ。他にも400年以上に渡り、継承された立花家の歴史を伝える史料は、併設の立花家史料館で見ることができる。

建物名称	旧柳川藩主立花邸 御花
建築年	1910（明治43）年
構造・様式	木造、入母屋、棧瓦葺
所在地	福岡県柳川市新外町1
電話	0944-73-2189
H P	http://www.ohana.co.jp/
開館時間	9:00～18:00（詳細HP参照）
アクセス	西鉄柳川駅よりバスで15～20分「御花前」下車 （バスを下車後、川下りで70分）
備考	国名勝

旧松崎旅籠 油屋

福岡県小郡市

きゅうまつざきはたご あぶらや



油屋 外観*

江戸時代、宿場町として栄えた松崎宿は旧薩摩街道沿いにあり、九州の主な大名が参勤交代の道として利用するなど多くの人が行き交ったという。慶応元（1865）年の資料によると、松崎宿には、26軒の旅籠があったと記されている。油屋は、その中で現存する唯一の江戸時代の旅籠である。昭和初期まで旅籠として用いられたが、その後、寮、芝居小屋、食堂、電気店など様々な用途として使用された歴史を持つ。2012（平成24）年度から着手した修理工事により、幕末の姿に復原された。

階高の高い2階建ての外観が特徴で、1階では荷馬を引き入れ土間で荷物の積み下ろしができるようになっていた。

「油屋」と呼ばれる主屋と、「中油屋」と呼ばれる座敷の2つの建物からなり、油屋は一般の宿泊客を、中油屋は武士などの身分の高い賓客を泊めるのに用いられた。油屋、中油屋の造りの格の違いを見るのも興味深い。



中油屋 油屋と対照的に門、塀で囲われている



中油屋 座敷

見どころ

建物中央に位置する大階段は、緩やかな勾配で、大空間の中にあって存在感を見せる。大きな竈などと共に当時の油屋の活気を偲ばせるものである。

また、中油屋の床下から発見された「胞衣（えな）壺」が見学できる。これは、江戸時代の風習で胎盤を納めた容器を人の出入りの多い場所に埋め、良く踏まれることで子どもの健康を願ったものである。



主屋 大階段



油屋 2階

油屋を訪れた著名人には、乃木希典の名が上がる。他にも、記録には残っていないものの西郷隆盛が宿泊したとの言い伝えが残っている。



復原された竈

床下に埋められた胞衣壺

建物名称	旧松崎旅籠 油屋
建築年	江戸末期
構造・様式	木造、寄棟造、茅葺（現在は茅葺風鋼板葺に整備）
所在地	福岡県小郡市松崎786-1
電話	0942-80-1920（NPO法人小郡市の歴史を守る会）
H P	http://ogorishinorekishio.ogori.net/
開館時間	10:00～15:00（毎月第2、4日曜日休館日）
アクセス	甘木鉄道「松崎」下車 徒歩5分、駐車場有
備考	小郡市指定有形文化財、入館料無料 *写真：小郡市

旧中尾家住宅（鯨組主中尾家屋敷）

佐賀県唐津市

きゅうなかおけじゅうたく（くじらくみぬしなかおけやしき）



主屋外観

鯨組主中尾家屋敷は、江戸時代に鯨組主として巨万の富を築いた中尾家の屋敷として建てられた建物である。特に主屋は当時の姿をよく残しており、佐賀県の重要文化財に指定されているほか、唐津市の景観重要建造物にも指定されている。



主屋外観（中庭より）

見どころ

江戸時代に唐津藩呼子に本拠を置き、170年に渡り鯨組主として栄えた中尾家の屋敷として建てられた建物。2008（平成20）年より保存整備工事が始まり、2011（平成23）年より一般公開されている。平入りの豪壮な造りの主屋は、吹抜けの広い通り土間により建物の歴史が感じられる。また、勘定場跡の建物は、見事な小屋組にて建てられており、「中尾家と捕鯨」に関する貴重な資料と共に是非一見して頂きたい。

【主屋】

主屋は、平入りの切妻造二階建てで、棟高9.135m、延べ床面積374.26㎡と非常に大きな町屋建築である。復原工事に先立つ調査によって、主屋の変遷がわかった。主屋の中央部は、柱や壁、建具が二重になっている。これは、主屋が1棟ではなく、北棟と南棟の建築時期が違う2棟の建物が一体化していることを物語っている。北棟が先に建築され、のちに南棟が増築されたことがわかった。建築された年代ははっきりしないが、主屋の建築年代は18世紀の前～中期にさかのぼると思われる。

【勘定場跡（本倉）】

現在の建物（本倉）の修理工事中に地下からかつての勘定場の基礎と思われる石列が発見され、建物の位置が特定できた。現在の建物（本倉）は、明治期に現在地に建てられたことがわかったが、新屋敷から移築してきた江戸期の建物との説もある。

旧中尾家住宅パンフレットより引用



勘定場跡内観



勘定場跡内観

建物名称	旧中尾家住宅（鯨組主中尾家屋敷）
建築年	18世紀前～中期頃 2011（平成23）年保存整備
構造・様式	木造二階建
所在地	佐賀県唐津市呼子町呼子3750-3
電話	0955-82-0309
H P	http://www.city.karatsu.lg.jp/
開館時間	8:45～17:00
アクセス	唐津駅よりバスで呼子まで20分
備考	休館日：水曜日（祝日の場合翌日）・年末年始



見どころ

古民家風ではなく、実際の古民家をサス組、土壁など伝統技術によって再生されている。

なるべく元の建具を使用し、新規の建具も古建具を探して取り付けられている。

更にオーナーのセンスが光る室礼が、古民家の魅力を引き出している。

新建材を多用しないが故に生まれる重厚感があり、これからの受け継がれる価値のある建物となっている。

また、右も左も似たような住宅が建ち並ぶ住宅街に古民家が移築されたことで、古民家の存在が際立ち、「ギャラリー喫茶 爨」は訪れる人々に古き日本の伝統家屋の良さを再認識させる場所になっている。



1階カルチャー教室・イベントスペース



1階喫茶店・ギャラリー



1階喫茶店カウンター

佐賀の山間にあった茅葺きのミカン農家の住まいを、ギャラリー喫茶として街なかに移築再生している。

移築先が建築基準法により、茅葺き屋根にできない地域だったため、茅葺き屋根を鉄板で覆ったような屋根形状になっている。

外壁は土壁下地の漆喰仕上げに腰板張り。

内部は吹抜けで、小屋裏も茅葺き屋根に見えるようにサス組、竹組がされている。

1階の半分は喫茶店兼ギャラリー、半分はカルチャー教室やイベントスペース、2階はギャラリーとして使われている。



2階ギャラリー

建物名称	ギャラリー喫茶 爨
建築年	2007(平成19)年
構造・様式	木造二階建
所在地	佐賀県佐賀市東佐賀町14-30
電話	0952-28-0752
H P	https://www.instagram.com/madoi_coffee/
開館時間	11:00~19:00(月曜定休)
アクセス	JR佐賀駅から車で10分(駐車場有)
備考	



客室 客出入口 厨房出入口 厨房

客室
客室
厨房・客室

【建物・大木家にまつわる物語】

竹屋は、江戸時代から続く屋号で、刀研ぎ・漆師屋=ヌシヤ（鞆の細工など）を営んでおり、国の重要無形民俗文化財でもある唐津くんちの曳山、刀町1番曳山「赤獅子：文政2(1819)年」、中町2番曳山「青獅子：文政7(1824)年」、京町12番曳山「珠取獅子：明治8(1875)年」の制作にも携わったとされる。

しかし、明治維新の際に発令された廃刀令によって職変えを余儀なくされ、店の前を流れる松浦川で獲れた川魚料理の食堂を始めた。その中でもうなぎを使った料理が好評だったため、1877（明治10）年頃よりうなぎ料理を専門とするようになった。

竹屋の家主である大木家は、唐津焼の名匠である中里家や炭鋤王として知られる高取家、佐賀銀行の前身であり旧唐津銀行を創設した大島家などとも親交があり、店内には関連する焼き物や書類などが多数残っている。

建物は、1998（平成10）年に唐津市で最初の国登録有形文化財となり、又、2016（平成28）年22世紀に残す佐賀県遺産にも認定され県民の思いが詰まった佐賀県の宝となっている。



見どころ

唐津神社行列図

唐津市の繁華街にある老舗の料理店竹屋。大正12（1923）年に唐津市鏡の大工脇山氏によって当時としては珍しい木造3階建てに建て替えられた。増改築は数回行われたものの、内観、外観とも当時の様相を残しており、歴史的な佇まいを今に引き継いでいる。

当時、唐津くんちの曳山は背が高く3階客室から見ていたようだが、現在は時の流れと共に電線等ができて2階客室から見るのが丁度良いと言う。

玄関や2階の入り口には松の大板、2階・3階の廊下の一部にはみちのく桜を使用している。通りを眺める縁側の床には継目のない5間長さの縁甲板が張られ、外壁は下部を手摺り、上部をガラス戸引違いとし、その外側には上下別々の雨戸を一筋に立てる形式で吹く風がとても心地よく建物内に入る。又、各階には滑車を使ったエレベーター様のリフトがあり料理の運搬も考慮した造りとなっている。

2階は、6畳ほどの客室が3部屋あり、床の間には当時の掛軸が掛けられ、季節の野花が生けられている。又、唐津の人から「とのさま」として慕われた小笠原長生の書は新築祝いに贈られたものだと言う。

3階は、10畳ほどの客室が2部屋あり、間仕切となる襖は敷居を含め取外しができ大広間としても利用できる。床の間には紫壇・黒壇が使われ、飾り棚も2階より凝った作りとなっており、金物も当時のままである。又、塗り壁も当時のままで、大正ガラスに飾り組子、欄間は桐で作られ、各階材料の選択にも意を注いでいる。通りに面した焼場からは、鰻を焼く香ばしく甘い香りが漂い、建物内は当時にタイムスリップしたかのようである。

是非、唐津の人・食・歴史と共に一見して頂きたい。



運搬用リフト



2階：客室



3階客室：敷居(取外し)



2・3階：縁側



3階客室：床の間・唐津焼



3階客室：床の間・唐津焼

【保存や活用の取組】

創業時は天然うなぎを使用していたため、冬場は漁量の減少により鶏のすき焼きや水炊きなどの鍋料理を出していた。今でも冬季はなべ物も提供するなど、現在も創業時の手法・スタイルのまま、うなぎ料理を提供しており、今でも継ぎ足してきた秘伝のたれを守る為、身内だけで経営している。最近では3階の広間で、ライブや大正・昭和のアニメーションの上映、活弁イベント、2017（平成29）年公開の大林彦彦監督作品「花筐/HANAGATAMI」の撮影にも使われた。



うなぎ丼肝吸い付



2階客室：小笠原長生の書

建物名称	竹屋
建築年	1923（大正12）年
構造・様式	木造三階建
所在地	佐賀県唐津市中町1884-2
電話	0955-73-3244
H	P https://www.karatsu-kankou.jp/gourmet/detail/124/Gourmet
開館時間	平日11:30~19:00（日・祝18:30）
アクセス	JR唐津駅より徒歩6分／大手口バスセンターより徒歩3分
備考	休み：毎週水曜日／第3木曜日／1/1~1/3

CALALI (旧藤生家新宅)

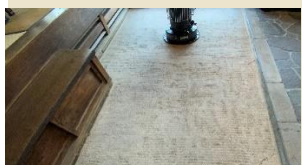
佐賀県唐津市

からり (きゅうふじおけしんたく)



見どころ

空き家になっていた為、取り壊して駐車場にする計画が進んでいた当建物。CALALI代表徳永氏との出会いは2018(平成30)年。1年かけて改装され2019(令和元)年5月にカフェCALALIがオープンした。先人たちの知恵や技術を引き継ぎ活かし、今でも挑戦し進化し続けるCALALI。当建物に使われている後世に残すべく職人技が建物の魅力をより一層引き立てている。



「土間」

寒い冬でも暖かい三和土土間。左官作業の仕上げに葎(ムシロ)で型押しされている。掃除がしやすいように端は平面になっている。



「畳・踏み床」

江戸時代の製法を使った踏み床。床の凹凸に、い草を敷き詰め厚さを均等にします。わら床を踏み固め何層にも重ねて作ることから踏み床と呼ばれる。サンド床(発砲スチロール)に比べ柔らかい為、手作業で縫われる。



「襖・名尾手すき和紙」

300年の歴史を持つ名尾手すき和紙。通常和紙の原料として使われる楮(コウゾ)ではなく、佐賀市大和町名尾地区に自生する梶の木が使用され薄手でも丈夫な紙に仕上がるのが特徴。和紙の凹凸から光のグラデーションが美しく映える。



「建具・御簾戸」

2階の収納に保管されていた御簾戸。障子とはまた違った採光と簾の隙間を通る風はゆるやかに吹抜け、影も楽しめる。上段下段を除き、間の6段は1本の竹である。



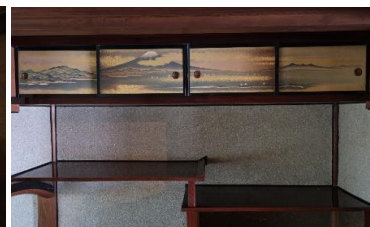
「浴室・換気」

松の形に彫られた照明周り。この箇所は外へ風が抜けるよう設計され、湯船に浸かり見上げる部分には富士山が彫られている。中庭を望むひし形の窓も当時の窓で季節の木々が楽しめる。

江戸期から栄える旧街道沿いに面する築143年の商家。1644(正保元)年の肥前国唐津城廻絵図では、鉄砲町と書かれ、組屋敷が並んでいた。江川町は、現在静かな住宅街だが、明治中期は、米屋・豆腐屋・酒屋・呉服屋などが建ち並び、活気のある通りであった。当建物は江川町随一の豪商、藤生平兵衛ゆかりの建物。藤生家の屋号は酒井屋。酒井屋という屋号の油屋で財をなし、その後1819(文政2)年に造り酒屋藤生酒造を始める。

1961(万延2)年には菓の取引をしていた記録が残り、多角経営をしていた事が伺える。当建物は木造2階建て棧瓦葺き切妻造り。外観は1階軒先に持送りを3箇所つけ、1階の西側と2階の中央部に出格子をつける。持送りは彫りが深く、意匠が優れている。玄関に入って土間を進むと吹抜けになっており当時は2階へ荷物を揚げ下ろした。現在も滑車がありその空間が活かされている。御座敷には、床柱に杉の磨き丸太を用い、天袋は唐津藩御用絵師、長谷川雪糖によるもので、表側には富士山が描かれ、裏側には虹ノ松原や大島が一望できる景色、舟に乗る人々が細かく描かれている。

表側の保存状態が良い事から、唐津くんちなどのハレの日に表面の富士山を見せたのだろう。御座敷から続く渡り廊下には、階段をかけて上がる月見部屋があり、8月9日は月が正面に見え、軌道も計算された設計となっている。お茶室もあり今後はお茶室と中庭の動線も復活の予定。中庭では、当時も今も季節の草花が楽しめる。2階は全て板の間になっており収納空間として使用されていた。当建物の前面道路は、曳山の巡行路であり14番曳山七宝丸を受け継ぐ町。2階の窓は、神を見下ろさない高さに設定されている。年月は経っても、当時からある建物から見える景色は、一言では表せない感慨深いものがある。



現在はカフェ・1日1組限定の宿・展示会やワークショップなどレンタルスペースとして営業されている。素材にこだわった飲み物や季節のスイーツも楽しめる。地元の人や伝統の職人技で蘇り、この地に残った当建物。最近では、地元の高校生も週に1度建物に触れ、社会勉強の場として手伝いに来ている。当時の姿が残るCALALI。

藤生家の歴史を大切に現代の方法で活かされ発信されている。



人が住むところに文化が落とし込まれ古民家は理にかなっていて面白い。と徳永氏、笑顔で一言。今もなお人が集う場所となっている。引出しの中には徳永氏からのメッセージ。”ご縁がありますように”舞台照明の仕事をされていた徳永氏こだわりの柔らかく暖かい光と影の空間、140年の歴史と今を是非体感していただきたい。

建物名称	CALALI (旧藤生家新宅)
建築年	1878 (明治11) 年
構造・様式	木造二階建
所在地	佐賀県唐津市江川町627
H P	www.calali-karatsu.com
開館時間	12:00~18:00
アクセス	JR唐津駅より徒歩13分
備考	休み：毎週水曜日/駐車場3台





茅葺き屋根の母屋



東屋（あずまや）



茅葺門（内側）



座敷から庭を望む

見どころ

心田庵は長崎の茶道において重視された経緯があり、1682（天和2）年の「心田菴記」や1817（文化14）年の「心田菴図」などの資料も残されている。江戸時代からの由緒ある日本庭園（池泉回遊式庭園）は春は新緑に、秋は紅葉に包まれ、風情がある景色と市内では非常に珍しい茅葺門、茅葺建物があり、皮の付いたままの木や丸太が柱として使用されていることなど、数寄屋造りの特徴を持っている。閑静な住宅地の路地裏に茅葺門だけが見てとれ、その奥にこのような広い敷地（約478坪）と茅葺建物が残されているとは想像しがたい。長崎市内に残る貴重な歴史的、文化的な遺産で、2013（平成25）年2月に長崎市の史跡に指定されている。

心田庵は、何兆晋（がちょうしん）が長崎片淵郷（現在の片淵2丁目）に建てた別荘である。何兆晋は何高材（がこうざい 1598-1671）の長男。父、何高材は帰化唐人であり日中貿易で財をなし、崇福寺大雄宝殿（国宝）をはじめ長崎の清水寺本堂（国指定重要文化財）を父子で寄進したことで知られている。また、石橋の寄進などにも尽力している。

何兆晋は1658（万治元）年に唐小通事（とうこつうじ）となり、1668（寛文8）年まで十年間つとめている。心田菴記の作者である長崎出身の儒学者、高玄岱（こうげんたい 1649-1722）は「およそこの心田庵は他と大いに異なり、奥深く穏やかな外観であり、拡がって隠れなく見える。この庵には、あらゆる所に細工を尽くしているが、肘掛けや敷物など贅沢なものはない。」「わずかな土地だが、心の田を子孫に残し耕させる余地があり、欠けるところはない。」「これはいわゆる心田と言うべきか。それゆえ、君の心田は千頃万頃（せんけいばんけい）の広さであり、まさに子が種をまき、孫が耕すのみなのであろう。」と記している。質素な中に心を豊かにする美しさを感じられると、心田庵の名の由来が語られている。江戸後期になると心田庵は唐通事をつとめた茶人、神代松蔭（くましろしょういん 1754-1833）の別荘となり、しばしば茶事が催されていた。



茶室



茶室



表玄関



和室床の間（右奥は茶室）



日本庭園（池泉回遊式庭園）

建物名称	心田庵
建築年	1668（寛文8）年推定
構造・様式	茅葺建物 木造平屋・数寄屋
所在地	長崎県長崎市片淵2-18-18
電話	095-829-1193（長崎市文化観光部文化財課）
H P	http://www.city.nagasaki.lg.jp/
開館時間	一般公開 春・秋（各20日間ほど）9:00～17:00 有料
アクセス	心田庵入口バス停徒歩3分 新大工町電停徒歩10分
備考	長崎市指定史跡 茅葺建物（和室・茶室）と庭園の貸出（申込必要）



池から見た透明度の高い池と四明荘（写真：島原市提供）



池へ張り出した座敷から庭園を眺める

明治後期に伊東元三氏（当時開業医師）の別邸（宅地187.8坪、木造瓦葺約40坪）として建築され、四方の眺望に優れていることから「四明荘」と名付けられた。庭園は昭和初期に禅僧を招いて造られたと言われ、京都の庭園などの枯山水式庭園と対極にあるような湧水を生かした近代庭園である。透明度の高い美しい水に色とりどりの鯉が優雅に泳ぐ庭園の池へは一日に約3000トンもの清水が流れていて市民に親しまれてきた。座敷は正面と左側面の二方が池へ張り出して縁を廻しており、一段高い屋敷から庭園を見下ろすと座敷と庭園が一体となり、ここでしか見られない独特の美しい景観が広がる。

見どころ

正面の庭だけではなく、居室棟裏手には観賞式の池泉式庭園がある。その四角形の池には四つの中島があり表の庭園とはまた違った趣がある。澄んだ水の周りは低い石積で護岸され、池底はいずれも砂敷き、池の中には沢飛石が配置されている。くぐり門から一步中に入るとピンと張りつめた静寂が同時にタイムスリップしたような感覚になる。入口付近には底まで見える程の透明度を誇る湧水口があり、こんこんと湧く様子を見ることができる。国の登録記念物、登録有形文化財となり、「鯉の泳ぐまち」の一角にある人気の観光スポットとなっている。



沸々と湧き出る美しい水に泳ぐ

島原半島は随所で水が湧き出ている、上下水道や農業用水などほとんどを地下水でまかっているほど湧水に恵まれた町である。特に半島の中央にある雲仙地溝内に特に湧水が多く、島原市街地では60ヶ所以上の地点から合計日量22万トンの湧水がある。島原市は水緑都市モデル地区に指定され、島原湧水群は「日本名水百選」「水の郷百選」にも選定されている。湧水群の多くは1972（昭和47）年の眉山崩壊後に出現したと伝えられる。この「四明荘」は島原市の中心街（鯉の泳ぐまち）にありながら静寂な佇まいをかもし出し、邸内にある池からは沸々と湧き出る大小の池が3つある。1日約3,000トンの湧水量を誇る池には鯉が泳ぎ、庭内には赤松や楓など色々な植栽が施されており、見るものすべてを魅了する。



くぐり門（表）



くぐり門



入口付近にある底まで見える透明度を誇る湧水口



池で優雅に泳ぐ



座敷の床の間



居室棟裏手にある鑑賞式の池泉式庭園



建物名称	湧水庭園 四明荘
建築年	明治後期
構造・様式	木造平屋 数寄屋造
所在地	長崎県島原市新町2-125
電話	0957-63-1121
H P	https://www.shimabaraonsen.com/outing/outing01
開館時間	9:00～18:00（休館日無）
入場料	大人300円 小人150円
アクセス	「商工会議所前」バス停 徒歩5分
備考	国登録有形文化財

茶室「閑雲亭」

長崎県平戸市

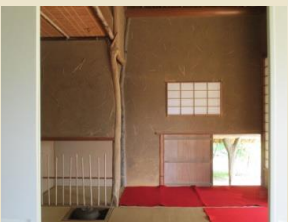
ちやしつ「かんうんてい」



茶室閑雲亭全体の外観 (公) 松浦史料博物館より提供

見どころ

「閑雲亭」は主として千利休の創意に基づく純然たる草庵茶室である。従って建築の資材並びに方法は、農村庶民の質素な住居様式を取り入れ、殆ど自然の材料を以って構築されている。屋根は棟、梁、桁を除き全部竹材を用い、葺草とし、軒柱は自然の丸太柱を組み合わせ、藁縄で固定し、ほとんど釘は使用していない。このように草庵様式ではあるが、亭の要素も完備した草庵茶室は稀である。その為に全国各地から大勢の観覧者やまた茶室研究の専門家が来訪し、調査研究するなどかなり世に知られており、これからも慎重な維持管理が必要である。

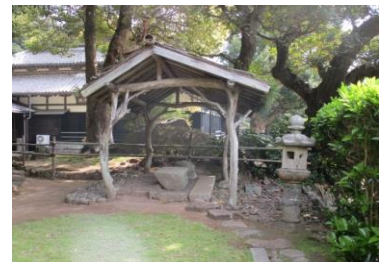


松浦史料博物館は1955（昭和30）年10月西海国立公園の指定と前後し、松浦家39代陸（すすむ）氏により資料等を寄贈され設立された。建物は鶴ヶ峰邸と称して1893（明治26）年に建てられた当主の私邸であったものである。
（県指定有形文化財）



茶室の内部 (公) 松浦史料博物館より提供

茶室「閑雲亭」は元来1893（明治26）年、松浦家37代松浦詮（号・心月）は、御館跡に居を構えることを計画し、1893（明治26）年に竣工、鶴ヶ峰邸と名付けた。鶴ヶ峰邸の庭園一隅に自らの設計による茶室「閑雲亭」を建立した。しかし残念ながら1987（昭和62）年（8月の12号）の台風により倒壊した。現在の「閑雲亭」は1988（昭和63）年9月に佐賀市の宮大工宮路肇氏によって再建完。従来の葺草を葺草に替え、目に見えない箇所には台風に対する補強をしているが、他は忠実に復元している。床面積は19.83㎡あり、お茶とお菓子（平戸の名菓）を楽しむことができる。



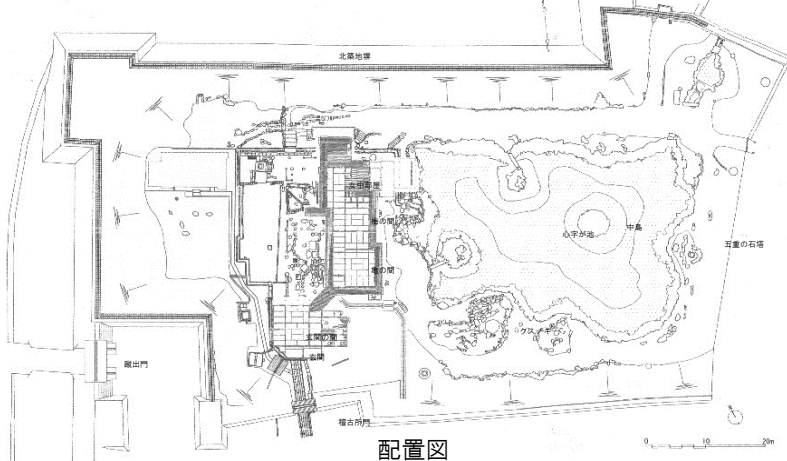
建物名称	茶室「閑雲亭」
建築年	1893（明治26）年 1988（昭和63）年再築
構造・様式	木造 庶民の質素な居住様式
所在地	長崎県平戸市鏡川町12
電話	0950-22-2236
H P	http://www.matsura.or.jp/
開館時間	9:30～17:00（12月29日～1月1日休館）
アクセス	平戸棧橋バス停より徒歩5分
備考	県指定有形文化財

石田城五島氏庭園隠殿屋敷

長崎県五島市

いしだじょうごとうしていえんいんでんやしき

五島家第30代盛成は、福江城（石田城）の工事が八分どおり竣工すると1858（安政5）年1月21日、子息の盛徳に家督を譲って藩政を辞し、城郭内にある隠殿として邸宅を建て、この東側に京都の僧、全正に庭園を作らせた。全正は金閣寺の丸池を模倣し、用いた石は鬼岳の溶岩を多用した。盛成はこのほか亀を好んでいたため、池護岸、中島などの随所に亀似た石を据えているのが特徴で、池は心の字を形どってつくられたとされ「心字が池」と命名されている。



配置図



玄関



亀の間より庭園を眺める

見どころ

隠殿屋敷は、第35代当主典昭により、2016（平成28）年2月29日に修復工事が完了した。亀の間、梅の間、神様の間の表具・建具（現物は大変貴重なものであり、今後の経年・活用によってこれ以上破損することを防ぐ意味で、別途保管されている）は既存に倣い、本紙複製、張り直しが行われているが、版木を制作して刷り込んで製作されたものである。



亀の間の唐紙と釘隠し



梅の間の唐紙と釘隠し



南化粧部屋の建具



女中部屋からの見通し



襖の取っ手



屋敷内の井戸



建具



石灯籠



樹齢800年を経たクスノキ（パワースポット）と隠殿屋敷外観



亀の間



梅の間

15畳敷で北側にトコとトコ脇を並べ、トコ柱はカリンの曲柱、地板はケヤキの1枚板を使用する。トコの東側は地板を上げ、その上部には吊束に竹状落掛を差して北東面に障子を建込み独特の書院とし、トコ脇では天袋を吊る。公的な接客に使用されたと思われる。

8畳敷で、北側にトコとトコ脇を並べ、「亀の間」と同様にすが、落掛けはアーチ状に拵え「仏間」とは続き間とし、当主の居間として使われたものと思われる。腰壁障子の棧組を丁字崩し、書院欄間の棧組は万字組子とする。間仕切り欄間は黒漆縁に万字入梅紋。

建物名称	石田城五島氏庭園隠殿屋敷
建築年	1861（文久元）年
構造・様式	木造二階建・書院造
所在地	長崎県五島市池田町1-7（無料駐車場8台可）
電話	0959-72-3519
H P	なし
開館時間	9:00～17:00（毎週火曜日・水曜日休園）
アクセス	福江港より徒歩10分。福江空港より車で10分
備考	国指定名勝

旧早川家住宅

長崎県諫早市

きゅうはやかわけじゅうたく



写真：諫早市公式HPより



見どころ



外観



2階天井

写真：諫早市公式HPより



外壁



1階天井



縁側

写真：諫早市公式HPより



式台



畳敷き



座敷



違い棚



縁側

写真：諫早市公式HPより

旧早川家住宅は、1874（明治7）年に元諫早家家臣の木下助内氏が自邸として建設し、その後、長男の元衆議院議員木下吉之丞氏をはじめ、代々子孫が住んでいた。また、同氏の娘婿早川員氏が入居され第9代諫早市長を務めたため「市長邸」の愛称で親しまれている。



外観（座敷側より）

建物は木造2階建てで、2階の大屋根は寄せ棟の茅葺、その周囲にとりつく1階の下屋部分は瓦葺になっている。大屋根の小屋根組は扱首組で伝統的な構法を示している。外壁は真壁造で、上部露出部を漆喰塗り仕上げとし、腰壁は目板打ちつけの縦板張りになっている。

床面積は1階が191.26㎡、2階が78.48㎡の計269.74㎡（約82坪）と規模が大きく、また近世の武家住宅に特有な玄関である式台を構え、違い棚、付書院、仏間を配した座敷の間と、これに付随した客用の便所を持っている。全体に土間部分が少なく、建設当初から室内のほとんどを畳敷きしている。農家系統の民家でありながら、格式を重んじる武家住宅に近い様相を見ることができ。明治以降の建設だが、その建築様式のあり方は旧藩時代の上級農家や庄屋クラスの形態をよく伝えている。

建物名称	旧早川家住宅
建築年	1874（明治7）年
構造・様式	木造二階建
所在地	長崎県諫早市小野島町2232（干拓の里）
電話	0957-24-6776
HP	http://www.kantakunosato.co.jp/
開館時間	9:30～17:00（入館16:00まで） 休館日：月曜日（祝日の場合翌日）12/30～1/1
アクセス	県営バス「干拓の里」前 駐車場あり
備考	諫早市指定有形文化財

旧楠本正隆屋敷

長崎県大村市

きゅうくすもとまさたかやしき



主屋正面



庭園、離れ側面

見どころ

1.5間の式台玄関の奥に15帖の座敷があり、西側に1.5間の床の間と1間の付書院が並び、床の間と直角に違い棚を設け、独特な座敷飾りを構成している。庭に面しては矩折に畳敷きの縁側を設け、土庇には濡縁を同様に付設している。



式台玄関から座敷を眺める



座敷廻りの土庇



座敷飾り



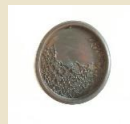
座敷飾り



欄間…北と南は組子を斜めにいれた珍しい意匠



釘隠し



取手



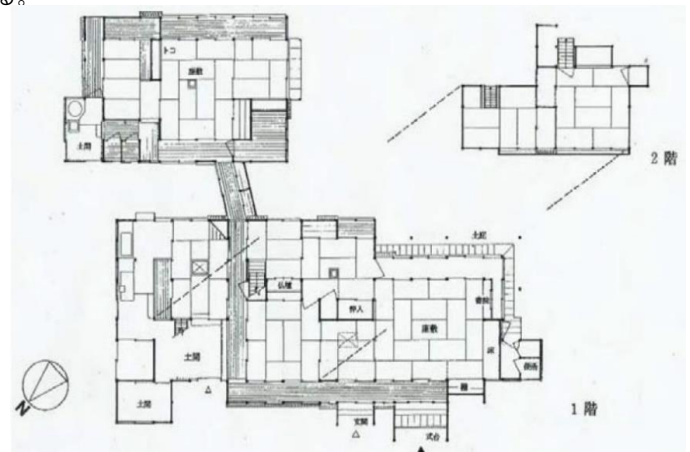
斜めの渡り廊下で結ばれた離れは10帖の座敷を中心にして専用の便所と風呂をもつ独立した生活空間を形成している。

離れから座敷・庭園を眺める

楠本正隆は尊王攘夷を掲げた大村藩三十七士の一人で、明治維新後は1872(明治5)年に新潟県令、1877(明治10)年に東京府知事、1893(明治26)年に衆議院議長を務めた。

この屋敷は楠本正隆により建てられもので、通りに沿って築かれた石垣よりもやや高い位置に寄棟造り、棧瓦葺き、平屋建て一部2階の主屋と渡り廊下で結ばれた別棟の離れが並び建っている。主屋は棟札から1870(明治3)年建設と解り、伝承では市内の深澤家の屋敷の材料を用いて建てられたといわれている。建設されたのは明治初期であるが、大村の近世武家住宅の典型的な形式を伝えている。

1992(平成4)年3月に大村市の史跡に指定されると同時に、以後全面的な修理・整備工事が施された。庭は従時の池泉回遊式に復元されている。



平面図(『城下町・大村と武家屋敷通り』より)



主屋、土間上部梁組



食堂の隅に設けられた棚

建物名称	旧楠本正隆屋敷
建築年	(主屋)1870(明治3)年 (離れ)明治前期
構造・様式	(主屋)木造平屋一部二階、寄棟造、棧瓦葺 (離れ)木造平屋、寄棟造、棧瓦葺
所在地	長崎県大村市玖島2-291-4
電話	0957-52-9885
H	なし
開館時間	9:00~17:00(月曜日・年末年始休館)
アクセス	大村ICより車で15分(駐車場有)
備考	長崎県指定有形文化財、大村市指定史跡 入場料 高校生以上200円、小中学生100円



表が金物店、手前が茶房とギャラリー「速魚川」



店舗側面と鰻絵

見どころ

環境庁より「名水百選」に選ばれた島原の湧水であるが、国内の四大名水（北海道の羊蹄山の湧水、神戸の六甲山の湧水、屋久島の縄文水、島原の湧水）にも入っている。1998（平成10）年に敷地内の湧水を利用して作った人工の川「速魚川」がある。このような街なかの湧水を利用したビオトープは少しずつではあるが、その活動の輪を広げつつある。中庭はどの部屋からも見える何かほっとする空間であり、喫茶やギャラリーでは静かな時間が流れる。喫茶では湧水を使った寒ざらしやコーヒー等がある。またかつての住居部分の2階座敷では展示会なども多く利用されている。



湧水の流れるビオトープ速魚川



展示会などがある2階座敷



店先に多くの商品が並ぶ

「速魚川」から中庭を望む



1階和室のガラス戸と格子窓

江戸時代後期の商家で、北に島原城を望む由緒ある島原街道に面するこの地に1877（明治10）年金物店として創業し、現在に至っている。金物店としては九州で2番目に歴史の長い老舗であり、とても趣のある町屋造りの建物で、店舗正面と側面の漆喰壁には龍の鰻絵（こてえ）、店舗脇の水汲み場には龍の石彫がある。2003（平成15）年には国の登録有形文化財になった。

平成の普賢岳噴火後は、昔ながらの金物店を大改装し幕末の町屋を復元してお店の奥に茶房とギャラリー「速魚川」（はやめがわ）を併設し、さらにお店の横に井戸の湧水を利用した人口の小さな川「速魚川」を生み出した。ここには突き井戸（地下110m）から自噴する毎分150ℓの湧き水が流れている。自由に飲んだり持ち帰ったり出来るのでこの湧水を求めて、遠くは福岡や佐賀、長崎、諫早、大村、そして島原半島のあらゆる所から毎日多くの来客がある。速魚川にかかる小さな石橋を渡って建物の中へ入ると、坪庭を囲むように昔ながらの囲炉裏の間やテラスがあり、渡り廊下、土間など懐かしくて安らげる空間が広がっている。茶房では、湧水と自然食材を使った美味しい料理を楽しむことができ、2階のギャラリーでは、全国様々な分野の作家の展示会、演奏家や歌手によるコンサートなどが開かれ、ギャラリーのもつ歴史的な空間との絶妙な調和が好評を得ている。また、金物店では国内外のロングセラーからチタン製の最新商品まで品質本位で選んだ金物類や明治から昭和の珍しい商品ストックも多数あり展示販売している。最近では幅広い世代の要望にも応えられるようなものも揃えてあり、明治から令和へと引き継がれている。基本理念は「こだわって本物、使って一生モノ」。



猪原金物店屋号。明治初期、吉備の国（岡山）から島原に移住し創業した初代猪原信平考案。吉備の「吉」を使用。



数千あると思われる金物類が並ぶ店内

建物名称	合資会社 猪原金物店
建築年	1861（万延2）年
構造・様式	木造二階建 町屋造
所在地	長崎県島原市上の町912
電話	0957-62-3117
H P	http://www.inohara.jp
開館時間	金物店 9:30～18:00（毎週水曜日休業日） 入場料 無料（喫茶・食事は有料）
アクセス	島原鉄道島原駅より徒歩3分
備考	国登録有形文化財、県景観資産登録

碧雲荘（旧熊本家住宅）主屋

長崎県壱岐市

へきうんそう（きゆうくまもとけじゅうたく）しゅおく



碧雲荘（旧熊本家住宅）主屋は、九州本土と対馬の間に位置する壱岐島の南東部にある印通寺港を見下ろすことができる高台に実業家熊本利平（1879-1968）によって建てられた住宅である。

碧雲荘が建てられる以前は旧石田村役場であったが、熊本がその地を譲り受け、周囲の土地も買い入れて宅地を広げていった。熊本は関東在住時に山縣有朋の別荘であった「古稀庵」を買い入れているが、碧雲荘はその庵に似せて建てたものとされる。

主屋は玄関を東に配し、向かって左側に洋風の応接間を置く。中庭を取り囲むようにコの字型に廊下を巡らし、その周囲に多数の部屋を配した造りとなっており、洋間を付随する点が特徴であるが、全体としては日本建築の特徴を基調とした和洋折衷的な室内意匠となっている。

現在は碧雲荘の一部が石田町総合福祉センターの建物と直結しており、利用もなされているが、昭和初期の豪華な和風住宅として良好な状態を保ち、またその価値は高い。

見どころ



南側の洋間は応接間となっており、寄木張りの床に絨毯を敷き、一部出窓風に棚を付ける。



柱下部には滝を昇る鯉が銅板に刻されている。

正門は南に見える壱岐水道を見下ろせる高台にあり南の碧雲荘入口から70mほど上りきった場所にある。間口7.6mほどの大きさをもつ切妻造で、銅板葺の屋根かつ頂部は棧瓦葺を乗せている。柱に控柱を伴う構造で中央に両開き、左右には片開きの扉をそれぞれ付けている。『熊本利平 ふるさとのあしあと』によれば、「台檜の丸太を柱に、戸板は屋久杉の一枚もので特有の年輪は美しく細やかな木目を露わしている」とある。また縁桁は京都の嵯峨野から伐りだされたもので、桂川、淀川を下り大阪で船積されてきたものとある。



南に畳縁を廻らせた座敷は数寄屋造り風に仕上げられており、欄間には繊細なすかし細工が嵌められている。



襖紙が部屋ごとに全て異なる柄となっている。



碧雲荘の入口にある石垣は昭和13（1938）年秋頃から地均しが始まり、石積みは翌14（1939）年1月から約1か年を要して完成させたものである。石材は佐賀県唐津市鎮西町産、総数6,500個の角石材を搬入している。底辺からきれいに積み重ねられた石垣は、美しい平行線を見ることができる。

同敷地内には旧宮家から下賜された茶室を昭和18（1943）年に移築した「花雲亭（茶室・待合）」もある。壱岐市指定有形文化財 長崎県まちづくり景観資産



建物名称	碧雲荘（旧熊本家住宅）主屋
建築年	1941（昭和16）年
構造・様式	木造平屋建 入母屋造棧瓦葺
所在地	長崎県壱岐市石田町石田西触字白水1486-1
電話	0920-44-6150（石田町総合福祉センター）
H P	—
開館時間	8:30～17:15
アクセス	印通寺港より徒歩10分、壱岐空港より車で6分
備考	国登録有形文化財、長崎県まちづくり景観資産 ※見学時前日までに要連絡

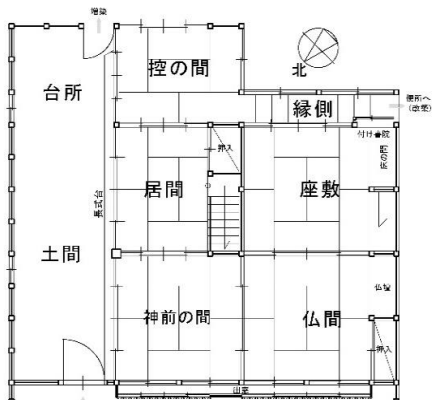
旧今西家住宅

長崎県松浦市

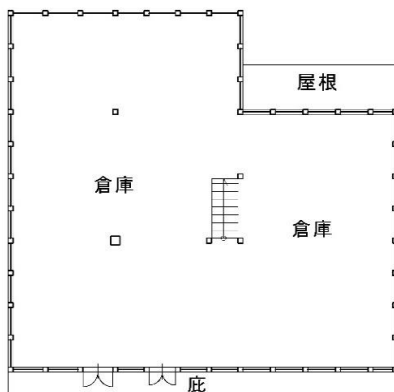
きゅういまいしけじゅうたく

旧今西家住宅は、1900（明治33）年頃現当主（今西誠司）の曾祖父にあたる今西卯太郎によって建てられた。厨子二階造りである。建設地の松浦市は元寇の史跡に富む北松浦半島の北西部に位置する閑静な港町で、昔は海に隣接し漁船との作業に特化していた。居住スペースの1階と2階の倉庫で構成され、2階の霧除け庇は開口部上部からの雨漏りを防ぐ役割を担っている。

建物を支える大黒柱は9寸角で通し土間に面した長式台は磨き上げられ、根太天井の格子とともに建物の重厚さが覗える。



1階平面図



2階平面図



土間から居間を見る

見どころ

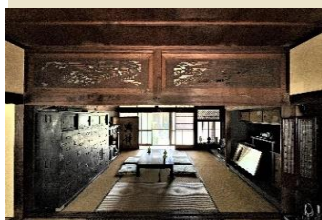
内外に渡って手入れされた建物は、建設当時の面影を良く残しており、持送り・大戸・箱階段は当時のままである。大戸は、荷車を土間に入れるためのもので、引戸も併設されている。土間の神棚、海の神棚、仏壇と建築主の信仰の高さが垣間見られ、箱階段の手摺・持送りの彫刻などに当時の大工の技量が覗われる。



出窓持送り



玄関の大戸



欄間



箱階段



座敷床の間



神前の間神棚（海の神棚）



釘隠し



土間の神棚



厨子二階造りの外観



二階 交差登梁

建物名称	旧今西家住宅
建築年	1900（明治33）年頃
構造・様式	厨子二階造
所在地	長崎県松浦市星鹿町岳崎免2348
電話	0956-75-0191
H P	なし
開館時間	事前予約が必要
アクセス	松浦鉄道御厨駅から徒歩40分
備考	入館：無料

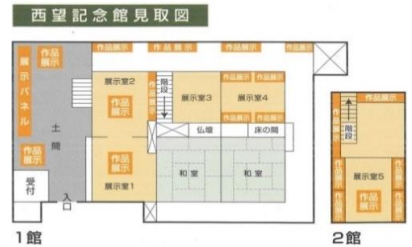
北村西望記念館

長崎県南島原市

きたむらせいぼうきねんかん



北村西望記念館は平和を象徴する長崎平和祈念像の作者で知られる日本彫刻界の巨匠、北村西望の生家である。旧名家北村家の四男として生まれ育った住宅で築200年以上を経過した瓦葺き2階建の木造建築物であり、西望氏監修のもと昭和60（1985）年に復原工事が完了。建築当時は150坪であったが、現在は100坪となっている。展示施設になっているが、外観はほぼ当初の姿を残している。静かな農村にたたずむこの記念館は、有明海や天草の島々や島原の乱で有名な国指定史跡「原城跡」も望め、素晴らしい景観の中にある。



見どころ



1階和室

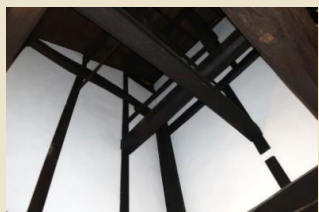
床の間には西望最後の書が飾られている。



1階廊下



2階展示室



玄関土間の天井



西望公園からの眺め



屋外の西望公園には13点、館内には、彫刻・書・絵画など約60点の作品が展示され、西望芸術の足跡をたどることができる。屋外には長崎平和祈念像の1/4サイズの作品も展示されている。

建物名称	北村西望記念館（北村西望生家）
建築年	1815（文化12）年
構造・様式	木造二階建
所在地	長崎県南島原市南有馬町丙393-1
電話	0957-85-2922
開館時間	9:00～17:00
	休館日：毎週木曜日・年末年始（12/29～1/3）
アクセス	バス：JR諫早駅前から小浜・口之津行き→口之津にて西望公園行きに乗換 車：南島原市役所南有馬庁舎から10分 駐車場14台
入館料	一般 200円 高校生 150円 小中学生 100円
備考	長崎県まちづくり景観資産（景資第2-19号）



熊本県指定重要文化財であり、1993（平成5）年に子飼から熊本城三の丸に移築復元された。細川刑部家（別名長岡刑部家）は細川家3代（肥後藩初代）忠利の弟、刑部少輔興孝が1646（正保3）年に2万5千石を与えられ興したものである。場内が鎮台用地になったことから刑部家は1873（明治6）年に子飼を本邸とし増改築を行った。建坪約300坪の旧邸の中心は玄関、表書院、御書院、春松閣で、それに茶室観川亭、長屋門、蔵、台所などが付属し、大名屋敷の形式を整えており、全国でも有数の上級武家屋敷としての格式を持っている。



見どころ

現在、熊本地震の影響で休館中であるが、紅葉の季節、梅の季節には期間限定で外庭が無料公開されている。無料公開では、多くの観光客が来場しており、復旧を望む声が多い。建物の復旧はまだまだ先となるようだが、公開の際には、是非、足を運んでいただきたい場所である。



↑熊本地震の影響で倒れた状態の塀



熊本地震で被災したため、現在、建物の内部は公開されていない。下記写真は被災前に撮影されたものであるが、上級武家屋敷としての格式があり、建坪300坪の広さを持つ建物には多くの見どころがある。下記の化粧ノ間、表御書院は、ほんの一部に過ぎない。熊本城の復旧作業が進む中、このような魅力ある和の空間を持つ建物についても早く復旧されることを望む。



化粧ノ間

表御書院

建物名称	旧細川刑部邸
建築年	1993（平成5）年に移築
構造・様式	木造
所在地	熊本県熊本市中央区古京町3-1
電話	096-352-5900
H	P http://kumamoto-guide.jp/spots/detail/81
開館時間	熊本地震の影響による休館中
アクセス	JR熊本駅から車約15分、もしくは、熊本城周遊バス（通称：しろめぐりん）博物館・旧細川刑部邸前下車
備考	写真：外観 熊本城総合事務所（熊本市） 内観 熊本通信HP



八代城主三代松井直之公が延宝年中（1670年）黄檗宗慈福寺を建立したが、その後、寺を廃し梶畑になっていた所に、1688（元禄元）年の春、生母崇芳院のために御茶屋を建て、松浜軒と称した。通称は「浜のお茶屋」である。1870（明治3）年に八代城が国有となったため、十代章之が増築して松浜軒に住居を移し現在に至っている。

古くからあった赤女ヶ池、赤女ヶ森がそのまま庭園にとりいれてあり、森の中に伏見の稻荷大明神を勧請した稻荷社をはじめ、歴代が子供たちの健やかな成長を祈念した児宮、菅原道真公を奉祀の天神社、愛馬の守護神馬頭観音が鎮座する。

赤女ヶ池、赤女ヶ森の謂れは古く、群れ泳ぐ「鯉」の古名に因んでの由来といわれ、大変縁起の良い所としても知られている。



（肥後花菖蒲）

肥後花菖蒲は肥後六花の一つ。花卉が大きくて幅広く、大型の花を咲かせるのが特徴。江戸花菖蒲の華麗さ、伊勢花菖蒲の優美さに対し、力強く男性的であると言われている。古来、肥後花菖蒲は鉢植えで座敷鑑賞用だったが、松浜軒のものは特別に地植えが許された。

見どころ

創建当時は松林越しに八代海や雲仙を望む雄大な庭園であった。園内の池には伸びやかな石の配置が行われ、築山（つきやま）の石組みや桂離宮天橋立（かつらりきゆうあまのはしだて）の景色に似た造形など、大名庭園として変化に富んだ風情をつくりだしている。

国の名勝にも指定されており、雄大な海と遙かな景色を取り込んだ意匠を持つ、江戸時代初期の大名庭園として貴重なものである。

6月上旬には約5,000本の肥後花菖蒲が見頃を迎え、人々の目を楽しませる。一般的には菖蒲が有名だが、秋の紅葉時期もとても風情があり、一見の価値がある。

また、松井家に伝わる家宝を展示する松井文庫の資料館があり、宮本武蔵ゆかりの「戦気」の軸や手彫りの木刀も展示されている。



茶室の縁側にたてられている戸のガラスは大正時代のものであり、ゆるやかな表面が悠久の時を感じさせてくれる。現在でも台風時に雨戸が立てられることがないが、周囲の樹木が守っているのか、ガラスが風雨で割れたことはないそうだ。

毎年6月の第1日曜日には肥後古流のお茶会が行われている。

※建物内は一般公開されていない。



松井神社境内にある臥龍梅（県指定天然記念物）

建物名称 松浜軒

建築年 1688（元禄元）年

構造・様式 木造

所在地 熊本県八代市北の丸町3-15

電話 0965-33-0171

H P <http://www.city.yatsushiro.lg.jp/kankou/kiji003124>

開館時間 9:00～17:00（入園は16:30まで）

6・11月の茶会時には座敷に上がる事も可能（有料）

開園日 月曜日（6月開花日は開園）、年末年始、旧盆

アクセス 九州自動車道八代ICから八代港線経由15分。駐車場あり

備考 観覧料 大人500円 小中学生250円 団体割引あり



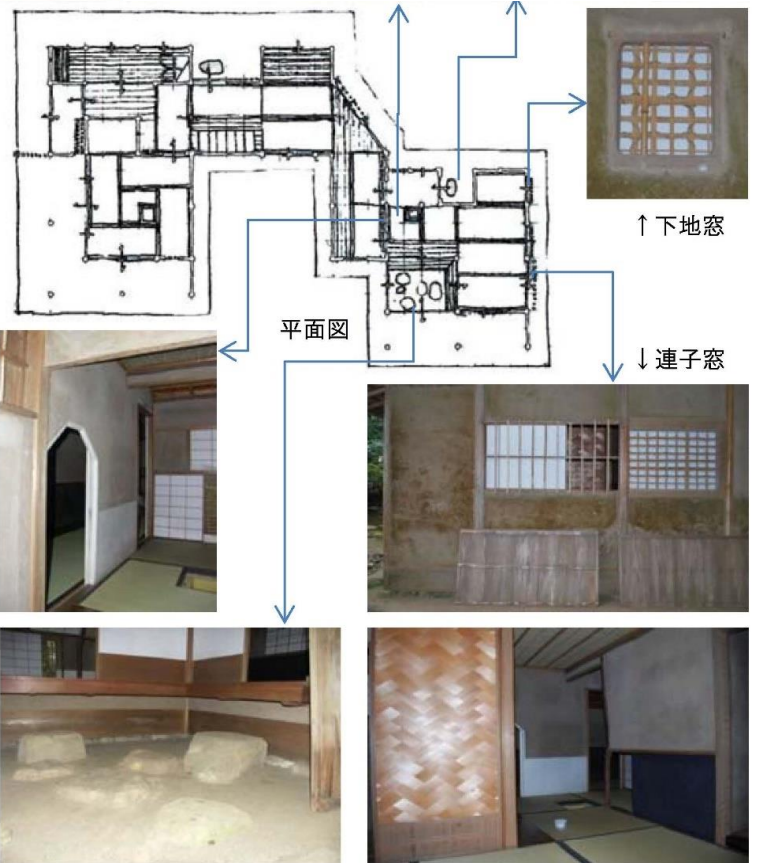
仰松軒は、茶道に造詣の深かった細川忠興（細川家2代）の原図に基づき大正12（1923）年に復元されたものであり、風流を極めた造りとなっている。茶室の前庭に苔むした石灯籠と手水鉢があるが、それは京都で忠興が愛用したものである。ことに、手水鉢は豊臣秀吉や忠興の茶の師である千利休も利用したと伝えられている。歴代の細川藩主は、この手水鉢を参勤交代の道中にも持参し、宿ごとに茶をたててはその風情を楽しんでいたとのことである。来場の際は建物と共に、この石灯籠と手水鉢を見ていただきたい。



見どころ

杉木立に囲まれた藁葺き屋根の茶室。樋は、横・縦ともに竹でできており、自然の中に溶け込んだ建物となっていた。建物の周りには飛び石が配してあり、土・石・苔のバランスが、風情を感じさせる。排水のための配管も、目に触れる部分は竹で覆われ、景観を損なわない工夫がなされている。

建物と自然との調和を是非体感していただきたい。



茶席には土間よりあがる茶室となっており、間取りが通常の茶室としては特異である。また、床の前の茶室と台目量との間は離れすぎており、一般的な茶室で通用する作法が、ここでは成り立たない。また、正面左にも扉がついており、そちらでも茶をいただくことができたのではと想像される。茶室として、二通りの使い方をしていたと見ていい。路地から茶室への誘導、土間が入り口であるということにより、滑らかに運ばれたようだ。

建物名称	仰松軒
建築年	1923（大正12）年に細川忠興の原図に基づき復元
構造・様式	木造
所在地	熊本県熊本市中央区黒髪4-610
電話	096-344-6753
H P	https://kumamoto-guide.jp/spots/detail/82
開館時間	8:30～17:00（入園は16:30まで）
アクセス	JR熊本駅から車で25分もしくはバスで約20分 立田自然公園入口下車 徒歩約10分
備考	利用料 高校生以上200円、小・中学生100円、30人以上の団体2割引、障害者手帳をお持ちの方は無料 写真撮影（平成30年）：持田美沙子



五木村は熊本県南部である球磨郡北部に位置しており、五木の子守唄で知られる人口1,000人ほどの村である。1963（昭和38）年から1965（昭和40）年に川辺川及び球磨川流域において大水害が発生したことを契機に、1966（昭和41）年旧建設省より川辺川ダム建設計画が発表された。そして今、ダムの建設は止まったままである。「CAFÉみなもと」は、時代に翻弄された建物が地元の人々と多くの村外協力者の手で蘇った空間である。ここで働くのは、U・Iターン者、インターンの学生たち。店内では、地元特産品の販売と同時に、地元住民からリサーチした日用品も並んでいる、地元にとってもなくてはならない場となっている。手作りの、人々に寄り添った新しいカタチの「和の空間」を感じてみてはいかが。



<Before>

<After>

見どころ

当建物は、川辺川ダム水没予定地にあった建物を移設・増築したものである。本体は戦後まもなく建築された平屋建ての古民家であるが、ダムの計画により建替えができない状況が続き、家族の変化と共に増築で対応。2000（平成12）年、ダム建設賛同の調印を機に解体。部材を譲り受けた現オーナーにより2003（平成15）年に現所在地に移設し店舗部分を増築。2017（平成29）年まで食堂及び民宿として利用されていた。移設の際に、川辺川ダム水没予定地で解体された別の建物の部材も活用し建築したという。まさに、ダムで翻弄された建物の集合体となっている。現在の姿となったのは、2018（平成30）年9月以降のリノベーションによるもの。学生を始め地元村民によるワークショップや、熊本県による「元気だけん！くまモン県プロジェクト」など、つながる人々のチカラで作りに上げられた。目に見えないものとなつがっている感覚を覚えるこの空間を、地元食材と共に味わって頂きたい。



（白滝公園）

公園の名称である白滝とは、高さ70m、幅200mの切り立った石灰岩の断崖がまるで滝が流れ落ちるように見えることから。見る者を圧倒する白い岩と、その下を流れる深いエメラルドグリーンの川との美しいコントラストが見事。園内には吊り橋や小さな鍾乳洞があり、夏場は川遊びにやってくる家族連れや若者らも多く、隠れた穴場として知られる涼スポット。



建物名称 CAFÉみなもと

建築年 2003（平成15）年 移設、増築

構造・様式 木造

所在地 熊本県球磨郡五木村乙1532-1

電話 0966-37-7810

H P <https://hizoe.co.jp/cafe/>

営業時間 11:00～18:00

店休日 月曜日・年末年始

アクセス 国道3号線沿い氷川町商工会より東陽町方面へ。約25km

備考 カーナビでは「白滝公園」で検索。すぐ向かい側。



瑞鷹酒造の2代目社長吉村彦太郎翁が、晩年「川尻の発展には公会堂が必要」と決意し、寄贈を遺言して逝去した。1931（昭和6）年に完成した川尻公会堂は、80畳の大広間と10畳の和室が2部屋あり、その周囲三方をぐるりと回廊が囲んでいる。

その後、熊本市の管理のもと運営されてきたが、耐震診断の結果、安全性を理由に2014（平成26）年10月より使用禁止となり、建て替えの提案もあったが、住民の強い希望により耐震改修が行われることとなった。

しかし、耐震工事着工直前の2016（平成28）年4月、熊本地震により被災。再設計後、耐震改修工事を経て、2019（平成31）年4月より利用が再開された。

戦前から戦後を通し、各種団体の活動の場として集会や会議だけでなく、カラオケ、忘年会、成人式、結婚式、葬式と幅広く利用されており、その利用は年間250日を超えている。

見どころ

90年前の石場建て構法の建物である。

耐震改修を行うにあたり、川尻の街並みに合った外観のまま、大広間と二間の和室には壁をつくらないでほしいという地域住民の要望が叶えられた。

木構造体は基礎に緊結しておらず、土壁、足固め、貫、木ずり漆喰、差し込み栓、ほお杖、格子壁を耐震要素に取り入れてある。

再生工事には、土、藁、竹、い草、木材など地元の自然素材をふんだんに使い、建築された当時の趣を残した建物となっている。



大広間



和室



回廊

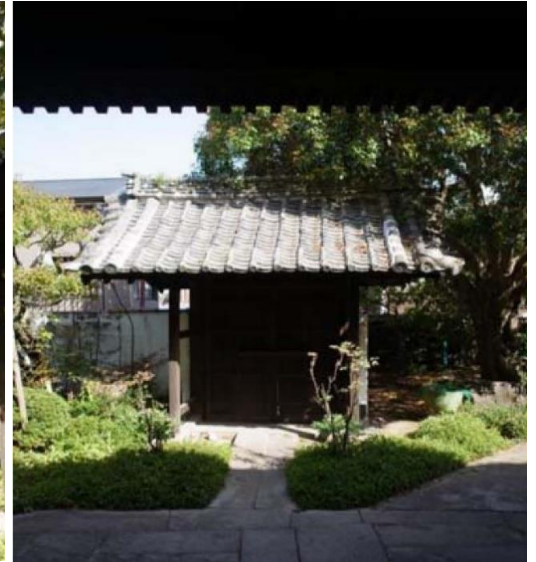


スロープ

建物名称 川尻公会堂
建築年 1931（昭和6）年
構造・様式 木造
所在地 熊本県熊本市南区川尻4-8-25
電話 096-357-9043
HP <https://www.facebook.com/kawashirikoukaido/>
開館時間 9:00～22:00
休館日 毎週火曜日、祝日、年末年始（12月29日～翌年1月3日）
アクセス 九州産交バス [海路口] 公会堂前
備考 見学希望を事前に問い合わせのうえ、施設利用者に配慮をお願いします。



玄関を見る



門を見る

見どころ

別府市は西に山、東に海がある。この建物は南へ長いかぎ型の配置をとり、東側の庭越しに別府湾を望む。入母屋造りの屋根等外部はほぼ当時の姿のままを残す。内部は一部改装し小屋組を見せるコンサートホール等として活用されている。ほとんどは当時のままで欄間や建具、庭など、いたる所で意匠が凝らされ、特に和室の本格的な書院造りは、床の間など随所で銘木が使われており、いずれも当時の仕事ぶりを堪能することができる。（1階ホールで棟札を見られる）

新築当時は旅館で、県内の旅館人気投票で大分県一となった程。訪れた人達には筑豊の炭鉱王の伊藤伝右衛門、麻生太吉、人形作家歌人の鹿兒島寿蔵や高浜虚子などと錚々たる名を連ねたことから格の高さをうかがうことができる。歴史の偉人達が過ごした場所で、築100年を超える建築と庭と景色、樹齢約200年のウスギモクセイを、現代に響く音楽や芸術と共に楽しむ。



2階へ上がる吹き抜けの階段

1899（明治32）年に建てられ1996（平成8）年まで営業していた当時「富士屋旅館」は鉄輪温泉の風情を残す明治時代の建物。

一時は老朽化のため取り壊す予定だったものの、この建物を現代に伝えるため、保存、再生し、活用することを目的として2004（平成16）年に再スタートしている。コンサートを開くホール、ギャラリー、ショップ「楽しい食卓はなやもも」や、カフェがあり、音楽、芸術、文化、食のイベントを通して、「百年の時を繕い今を愉しむ」事の出来る場所となっている。



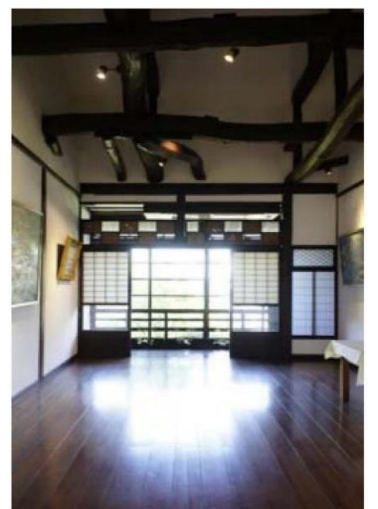
2階 明治の和室 貸室として利用



2階の一也百ホール



1階のロビー カフェスペース



2階のギャラリースペース



富士屋旅館 ※HPより

建物名称	富士屋Gallery一也百
建築年	1899（明治32）年
構造・様式	木造二階建・数寄屋
所在地	大分県別府市鉄輪上1
電話	0977-66-3251
H P	https://www.fujiya-momo.jp
営業時間	10:00～17:00月火定休（祝祭日・イベント時は営業）
アクセス	別府駅から車で15分、鉄輪バス停から徒歩2分
備考	国登録有形文化財



門から見る

丸毛家住宅は、江戸時代後期の建築様式をとどめる、臼杵市でも数少ない武家住宅の一つである。この丸毛家住宅の敷地は、江戸時代に藩より屋敷地として、代々丸毛家に与えられたものである。丸毛家住宅の西側には竹林をのぞみ、南に面したいわゆる「奥」の部屋に隣接する縁側では、ゆったりとした時間を過ごすことができる。



「上之間」「次之間」「下之間」前の縁側

見どころ

玄関は二つあり、建物入口の正面にお客用の「表玄関」、入口入って左側に家族用の「内玄関」がある。「内玄関」には大きなかまどが据えられている。屋敷の内部は大きく「表」と「奥」の二つに分けられており「表」は接客の場、「奥」は家族の生活の場となっている。「表」は眺めがよく落ち着いた場所に造られており、「奥」は日当たりの良い南側に造られている。接客や体面を重んじた武家の格式を知ることができる建物である。

丸毛家はもともと美濃国（今の岐阜県）の武士で、明智光秀の家臣であった斎藤氏の一族であった。そのため、光秀が羽柴（豊臣）秀吉によって滅ぼされた1582（天正10）年の山崎の合戦では、明智方に味方し敗れたため、長く流浪していたと丸毛家家系図に記されている。



表玄関



南側に面する縁側



「上之間」

1628（寛永5）年丸毛弥市右衛門忠勝の代に、忠勝の外祖母が稲葉一鉄公（臼杵藩初代稲葉貞通の父）の娘であったため、その縁で三代藩主一通公に元高二百石で召し抱えられ、町奉行役を務める。臼杵藩では上級の武家であった。



内玄関の土間にあるかまど



内玄関から奥を見る



「仏間」など生活の場を庭から見る

丸毛家住宅は武家の生活様相や文化を理解してもらう公開施設として、また、まちなみ観光の一拠点として活用するため、1989（平成元）年に建物の解体修理を行った。その後、1990（平成2）年3月16日に臼杵市の有形文化財として指定され、2003（平成15）年「昔のくらし」を体験できる施設となった。



「上之間」「次之間」「下之間」前の庭から見る

建物名称	旧丸毛家住宅
建築年	江戸時代後期
構造・様式	木造平屋・武家屋敷
所在地	大分県臼杵市大字海添字本丁13
電話	0972-86-2725
H P	https://www.city.usuki.oita.jp/docs/2014021200149/
開館時間	9:00～17:00（火曜日休館）
アクセス	JR日豊本線宇宿駅から徒歩10分
備考	臼杵市指定文化財

旧真光寺休憩所

大分県臼杵市

きゅうしんこうじきゅうけいしよ



二王座歴史の道にある旧真光寺



門から見る



この窓からの眺めも素晴らしい

臼杵は、武家屋敷や古い神社仏閣が点在する歴史ある街である。旧真光寺のあるこの地区は臼杵を代表する景観の一つで、1993（平成5）年には国の都市景観100選に選ばれた。旧真光寺は浄土真宗本願寺派の支院として、臼杵藩主だった稲川小右衛門の長男宗適が1716（享保元）年に開基した寺で、1855（安政2）年に建立された建物である。1992（平成4）年に廃寺を改修し、現在は市の無料休憩所として使われており、観光案内も受け付けている。また、随時展示会なども行われている。改修時には筋違にて構造補強が行われた。道のカーブに沿って建物も曲がり、2本の軸線が通る平面はユニークで、2階の「歴史の道」を見下ろせる座敷には、変形した畳が敷かれている。

見どころ



窓から二王座の道を見る

二王座歴史の道は大友宗麟時代から街道筋として役割を果たした道である。臼杵城のお膝元に位置する二王座は、阿蘇山の火山灰が固まってきた凝灰岩の丘で、あちこちの岩を削り割ってつくられた「切通し」の道がある。狭い路地のいたるところにどっしりとした量感溢れる門構えの武家屋敷跡、白壁の土蔵や宗派の異なる歴史ある寺院が軒を連ね、城下町特有の面影を残した地域を窓越しに堪能することができる。



広い土間 観光案内のコーナーも設けられている



2階の和室



元本堂だった和室 イベントも行われる



「うすき竹宵」※「臼杵のえんどうさんちHPより」

毎年11月初めに「臼杵石仏」を作ったと言い伝えられている真名長者伝説を再現したうすき竹宵という儀式が行われる。うすきの伝統的な街並みを「竹ぼんぼり」の優しい光が包む。この時に旧真光寺休憩所でも写真のような竹ぼんぼりとのコラボが行われ、多くの人々を魅了する空間がつけられている。

建物名称	旧真光寺休憩所
建築年	1855（安政2）年建立 再生竣工1992（平成4）年
構造・様式	木造二階建
所在地	大分県臼杵市大字二王座
電話	0972-64-7130（臼杵市観光情報協会）
H P	—
開館時間	8:30～17:00
アクセス	臼杵駅より徒歩約15分
備考	稲葉家下屋敷前の市営駐車場（有料）

照波園（旧国武金太郎別邸）

大分県別府市

しょうはえん（きゅうくにたけきんたろうべってい）



照波園外観

旧国武金太郎別邸は、久留米絣で財を成した久留米財界の有力者、国武金太郎の別荘である。1927（昭和2）年に京都の職人によって建てられた。なお、棟梁は大分市出身の田仲亀鶴である。

椽瓦葺き入母屋造りの平屋建。当時は、金波、銀波の二間と茶室があり、金波の間は数寄屋風の書院造りで、銀波の間は民家風の造りであった。その後、1953（昭和28）年に九州電力が保養所として受け継ぎ、洋館部分を増築。現在では、建物の保存を目的に2016（平成28）年にリゾートホテルへと生まれ変わった。旧館である和風部分は「茶寮 照波園」として茶室に、増築された洋館部分はサロンとして見学ができる。

見どころ



洋館内観

増築された洋館部分。外観は英国の民家風の佇まいである。玄関ホールは吹抜空間には暖炉が設けられており、本格的な洋室空間を構成している。また、保養所時代に大浴場だった場所はギャラリー兼ショップとして使用されている。



洋館外観



照波園内観 杵や曲木を組み合わせている



照波園入口

旧館である和風部分「茶寮 照波園」

玄関の船底天井には久留米絣の版木が一面に張られている。また、多くの奇木、珍材が使われており、高価な材を用いた贅沢な造りであることが分かる。他にもキリシタン禁制の高札や水車の側板を使用した天井など当時の建材などがそのまま残っており、大変貴重な建物である。



照波園廊下



照波園茶室



久留米絣の版木



キリシタン禁制の高札

建物名称	照波園（旧国武金太郎別邸） AMANE RESORT GAHAMA内
建築年	1927（昭和2）年
構造・様式	木造平屋建・入母屋造 椽瓦葺
所在地	大分県別府市上人ヶ浜5-32
電話	0977-66-8833
H P	https://gahamaterrace.com/
開館時間	12:00~14:00 ※事前にフロントへ要連絡
アクセス	別府ICから車で15分
備考	



国東半島の最北端、姫島行き連絡フェリーが発着している伊美港近くに位置する。南の山側には神仏習合の千三百年の歴史文化の残る両子寺があり、北の海側は周防灘に面している。また、古くから国東半島六郷満山の仏教文化の街として栄え、古来からの仏教遺跡などの文化財が数多く点在する歴史豊かな地域である。そこに明治の初め、今から約140年程前に造り酒屋の母屋として「重光銀九郎」が建てた木造三階建ての天守閣に似た外観が印象的な建物である。

「橋本屋」（当時の屋号）は昭和初期3代目の時にすでに造り酒屋はやめていたが、昭和中期の終戦後の4代目の時代は材木商となり、地域の中心であった通称「三階屋」は役割を変動していく。現在は傷んだ三階屋を丸2年かけて全面的な修復復原し、福岡市にある純真学園国見研修所・涛音寮として約25年前の1997（平成9）年4月にオープンし、国東固有文化の交流の場となっている。

見どころ

一番の特徴としては、木造3階建ての外観・建物で、県内では数少なく貴重な存在である。改修時の瓦の面積は近隣のお城より面積が広がったとの事。3階からは海を眺める事ができ「涛音寮」の名前の由来になっている。



案内冊子より町村合併祝賀写真 1955（昭和30）年4月

1階の土間一角は、涛音寮が生家で三階屋の主としては5代目の女性表具師「和田木乃実」氏の仕事場でもあり、着物や古布を使った創作屏風を作成・展示販売をしている。掛軸の修復作業や美しい屏風が出来上がるまでの工程も見学可能。息子夫婦と3人で表具師として活躍している。



1階のギャラリー兼工房



2階のギャラリー



3階のギャラリー

2階は改修時に一部3階小屋裏を見せる吹抜の空間とし、開放的な展示室となっている。季節毎に違った作家の展示内容で楽しませてもらえる。3階は当時のままの造りの展示室となっており、迫力ある格天井が包む空間の中での見学は風通しも良く心地よい。



庭を眺める

鶴と亀と大海原を表す枯山水の庭を鑑賞しながら食事や「野点コーヒー」を楽しむことができる。



たこめし御膳



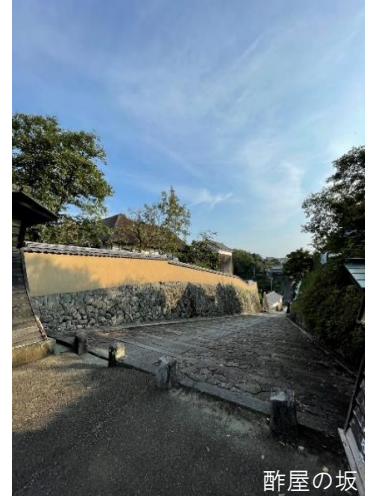
大黒柱と梁



ひょうたんの細工

3階建てを支える檜の34cm角の大黒柱と梁せい50cmを超える松の梁は圧巻の存在でギャラリー中心部に存在する。他の管柱も五寸五分から六寸で構成されている。床の間などをよく観察すると柱や床板に隠し細工が数か所見られ、当時の大工技術に出会えるかもしれない。

建物名称	涛音寮 茶房さんがいや
建築年	明治初期
構造・様式	木造三階建 入母屋造 棧瓦葺
所在地	大分県国東市国見町伊美2017
電話	0978-82-1328
H P	http://www.touinryou-sangaiya.com/
開館時間	9:00~17:00
休館日	火曜日（祝日の場合は営業）
入館料	大人 200円 高校生以下無料
アクセス	大分空港より車で50分
備考	



酔屋の坂

大分県杵築市の大原邸は、江戸後期に杵築藩の家老、用心など、上級武士の屋敷だったとされる建物である。かつて武家屋敷が軒を連ねた城下町の高台に建ち、長屋門や風格ある茅葺き屋根の主屋（建築面積約71坪）、敷地面積656坪の広さと豪華な回遊式庭園を備えている。大分県指定有形文化財に指定されており、杵築に於ける最も貴重な遺構の一つである。

土堀と石垣が印象的な酔屋の坂は石畳が非常に美しい坂道である。その酔屋の坂隣りに位置する。

見どころ



武家屋敷の顔・式台玄関



主屋の庭園を望む座敷



主屋の仏間

主屋の部屋は、接客部分と裏の住居部分が完全に分離されており、公私を区別してしつらえ、来客用座敷と次ノ間は白壁・高麗縁の畳敷き・畳表は備後表、これに対し家人用は土色の泥壁・畳縁は模様無し・畳表は七島表としている。昔は、杵築市は七島藺の生産が盛んで生活部屋の畳表で日常で使われていた。座敷には豪華な欄間などの装飾はなく、質実剛健を旨とした武家の暮らしが垣間見られる。

茅葺屋根の主屋に入母屋造りの式台玄関（間口2間、奥行1間）を備えた堂々たる姿は、この家の格式の高さをあらわしている。式台の奥に設けられた玄関ノ間は、玄関から魔物が入らないよう魔除けの意味を持つとされる赤色の土壁になっている。



茅屋根と煙

炊事場は天井板を張らず、その煙で屋根を燻すことで屋根裏に虫がつかないようにしていた。



座敷と床の間

座敷の床の間は、畳を敷いた床畳である。畳の縁は紋縁となっており、簡素な中に、格式の高さがうかがわれる。



弓天井

家にいるときも武道に励み、その姿を先祖に見てもらうため仏間で弓の稽古ができるように天井を高くしていたといわれている。



広大な回遊式庭園

四季折々の表情を見せる美しい庭園から主屋を望む

建物名称	大原邸
建築年	江戸時代後期
構造・様式	木造平屋建・寄棟造茅葺・武家屋敷
所在地	大分県杵築市杵築207
電話番号	0978-63-4554
開館時間	10:00～17:00（入邸は16:30まで）
入館料	一般300円・小中学生150円
アクセス	JR杵築駅→国東観光バスまたは大分交通バス杵築バスターミナル行きで約10分終点下車、徒歩6分
H	P
URL	https://www.city.kitsuki.lg.jp/soshiki/7/bunka/bunkazai/bunkazai/1813.html
駐車場	共同駐車場利用
備考	杵築市北台南台伝統的建造物群保存地区内 大分県指定有形文化財

的山荘（旧成清家日出別邸）

大分県速見郡日出町

てきざんそう（きゅうなりきよけひじべってい）

的山荘は、日出町の陽谷城三の丸跡地に、馬上金山（現杵築市山香町）の採掘で巨額の富を築いた成清博愛（なりきよひろえ）が築いた旧邸宅である。別府湾を一望する広大な敷地（3,670坪）に棧瓦葺近代和風建築の粋を凝らした豪華な家屋（約300坪）、さらには別府湾を泉水、高崎山を築山に見立てた借景の見事な庭園が広がる。1914（大正3）年3月に着工、1915（大正4）年1月に落成し、総工費は25万円（現在の価値でおおよそ7～8億円）と記録されている。

「的山」とは博愛の雅号で、数々の炭坑や金山の採掘事業に失敗し、最後の望みとして辿り着いた馬上金山で「山を的（あ）てたい」と名付けたと言われている。後にこの邸宅は、彼の偉業を讃えて「的山荘」と名付けられた。



玄関前のロータリー

見どころ 随所で、江戸時代以降の伝統的手法を残した豪華な日本家屋の醍醐味を味わえる。



正門



玄関・式台

棧瓦葺の腕木門から玄関前のロータリーまで、綺麗な石畳が続く。庭園内には8本もの皇族記念植樹があり、季節折々の木々を楽しめる。玄関の式台も歴史を感じさせる。



個室



床の間

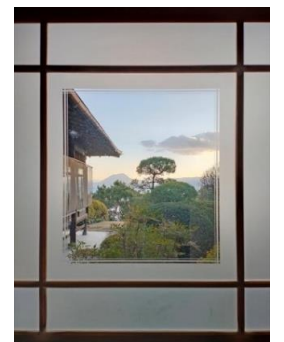
皇族の方の迎賓館とされていた個室や48畳の大広間があり、床・書院等の座敷飾り、様々な形状の欄間彫刻、襖の引手金具一つとっても、細部まで、細やかな拘りが感じられる。著名人の扁額や掛け軸・色紙なども貴重な一品である。大広間には、一枚板から作られた箒欄間（機織り道具の箒のように縦棧が細かく彫り込まれている）、細かい彫金が施された大正時代の西洋ランプ（電球と和紙による穏やかな明かりを放つ）、光の加減により雲の絵が浮かび上がる襖等もある。その他、現在は採掘禁止となっている京都の鞍馬石を沓脱石としていることや、邸宅内や外塀に太平洋戦争中の弾痕が残されている等、希少価値が高く見どころ豊富な建物である。



大広間



政財界の社交場でもあった的山荘は、1964（昭和39）年に、博愛の孫（信輔）が料亭として開業し、城下かれいの料亭として全国的に知られ、皇族をはじめ多くの著名人が訪れるようになった。日出城の下、海底の真水が湧き出る所に生息する城下かれいは、古くから美味淡泊と珍重され、美食家の木下謙次郎の書いた『美味求真』で日本の名物料理八選に選ばれた逸品である。現在は日出町の指定管理施設として、城下かれい・日出の鱧をはじめ、関アジ・関サバ、臼杵ふぐ、豊後牛など地産地消を志した割烹料理のご賞味と共に風情ある和の空間を堪能できる。



的の山荘に残るガラスのほとんどは、建築当初の手作りガラスで、気泡入りや景色がゆがんで見える特徴がある。ガラスごしの景観はとても味わいがあり、木製建具を額縁として絵画鑑賞をしているような雰囲気さえある。見る位置や角度で異なった雰囲気を出し、高貴な楽しみ方ができる。

建物名称 的の山荘（旧成清家日出別邸）

建築年 1915（大正4）年

構造・様式 木造平屋建一部二階建・棧瓦葺近代和風建築

所在地 大分県速見郡日出町2663

電話 0977-72-2321

H P <http://tekizanso.com/>

開館時間 10:00～22:00（年中無休）

アクセス 日出ICより車で8分、JR陽谷駅より徒歩8分

備考 的の山荘（附日本庭園）：日出町有形文化財

旧成清家日出別邸建造物5棟及び土地：国指定重要文化財

旧成清博愛別邸庭園（的の山荘庭園）：国指定登録記念物



杵築市の初代名誉市民となった一松定吉氏が母親のために建設した邸宅である。現在の豊後高田市にあたる美和村出身の一松定吉氏（1875-1973 享年98歳）は、杵築藩の剣術や槍術の指南役であった一松家の家督を継ぎ養子に入り、18年間検事を務めて弁護士になる。その後、第一次吉田内閣で各大臣を歴任し、34年間政界にて活躍する。

1927（昭和2）年より2年の歳月をかけて建てられた邸宅は、1957（昭和32）年に杵築市に寄贈され「一松会館」として市民の憩いの場として開放されていた。その後、市役所の移転に伴い平成12（2000）年に杵築城と海を望む現在地に移築され「一松邸」と改称し一般公開している。昭和初期における木造建築の技術の粋を結集した邸宅として知られており、座敷からは守江湾から豊後水道を一望できる絶景を楽しむスポットとなっている。

見どころ

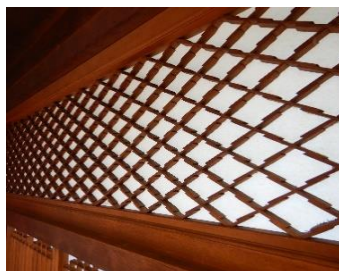


縁桁は約10mの杉材



杉の柂目の一枚板の縁側

高級木材をふんだんに使用した贅沢で洗練された趣ある屋敷である。武家屋敷の特徴として縁桁は天然絞りと呼ばれる特徴の模様木が木の表面に現れている事などから、非常に珍しく高価な材料が使用されている。床板は長さが約8mと規格4mの倍の長さの無垢材で客をもてなしている。床柱には黒柿、床の間の板はトチ、式台は桜と随所に高級木材が使用されている。



「松皮菱」と呼ばれる書院の障子



格天井の客人用御手洗



昔のままの手吹きガラス



装飾付きのマジックミラー



離れの二の間は中央に柱がなく、襖を閉めると3部屋に仕切る事ができる大分の特徴的な技法で、合理的に部屋を活用することができる。その他にも中央に3帖畳敷の奥様のダンス置き場、今でいうクローゼットの部屋もある。



表裏でも違う装飾の引手



富士の欄間



掛け障子

建物名称 一松邸
 建築年 1929（昭和4）年8月
 構造・様式 木造二階建 入母屋造 棧瓦葺
 所在地 大分県杵築市南杵築193-1
 電話 0978-62-5761
 H P <https://www.city.kitsuki.lg.jp/soshiki/7/bunka/bunkazai/bunkazai/4642.html>
 営業時間 10:00～17:00（入邸は16:30まで）
 休館日 12月29日～1月3日
 入館料 個人：一般 150円 小・中学生80円
 駐車場 共同駐車場利用

南国といわれる宮崎にも険しい山間部や、雪が積もるほどの地域があり、それぞれ地方独特の建築様式を持った民家が多数あった。今から約150年から200年前に建てられたものが【宮崎県総合博物館 民家園】に移築復元されている。



旧藤田家住宅

旧藤田家住宅は、宮崎県北西部の五ヶ瀬町三ヶ所から、1977（昭和52）年10月から1年かけて移築復元したものである。建築年代は、柱に刻まれた文字から1787（天明7）年に建てられたことが分かっており、県内で確認された民家の中で最も古いものである。

復元された平面は、土間なしのヘンヤ（茶の間）とオモテ（客間）の2室で、三方に吹き放ち部をもつ特殊なものである。また、県内の民家のほとんどが外壁を板材で仕上げているのに対して、唯一土塗壁であり、民家としては、貴重な文化財といえる。



米良の民家

米良の民家は、西米良村にあった黒木家住宅を移築復元したものである。この民家は、山間の三段石積みの上に建てられていたもので外観・間取りなどに古い西米良の農家の形が残されている。

また、がっちりした骨組みの馬屋も残っている。言い伝えにより、1821（文政4）年頃に建てられたとされている。



椎葉の民家

椎葉の民家は、椎葉村にあった清田家住宅を移築復元したものである。この民家は、宮崎県北西部に分布する並列型農家の典型で、間取りは部屋を一列に横に並べる形式で、三つの部屋と土間からなっている。また、手前には板縁が通っている。

解体中に発見された墨書きによって、1864（元治元）年に建てられたことが分かっている。

旧黒木家住宅は、霧島山麓の高原町蒲牟田地区から、1974（昭和49）年9月から1年かけて移築復元したものである。建築年代は、解体中に発見された墨書から1834（天保5）年からの2年間であったことが確認されている。

この建物は県南西部に分布していた分棟型農家の典型で、妻入りの土間付きナカエ（茶の間）と平入りのオモテ（広間）の2棟からなっており、テノマ（樋の間）と呼ばれる板間を通して連結されている。

見どころ

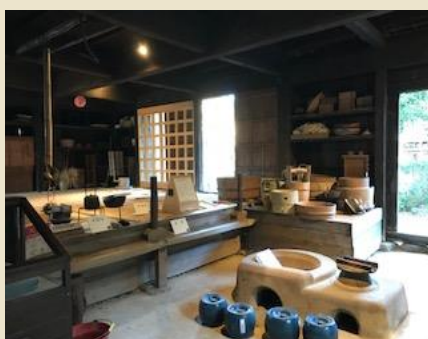
これらの4棟の住宅は、中に入って見学することができ、囲炉裏や部屋の設え、燻された高い小屋組などを見ながらゆったりとした時間を過ごすこともできる。また宮崎神宮から民家園、博物館周辺は地域の方々の散歩コース、子どもの遊び場にもなっている。



季節ごとにイベントが開催され、四季折々の花々が咲き来訪者を迎える。



旧藤田家住宅内観



旧黒木家住宅内観

建物名称	宮崎県総合博物館 民家園
建築年	1787（天明7）年他
構造・様式	木造
所在地	宮崎県宮崎市神宮2-4-4
電話	0985-24-2071
H P	http://www.miyazaki-archive.jp/museum/
開館時間	9:00～17:00
アクセス	・宮崎交通バス：綾・国富方面行き又は平和が丘・古賀総合病院方面行き「博物館前」下車徒歩3分 ・宮崎交通バス宮崎神宮行き終点下車徒歩12分 ・JR九州「宮崎神宮」駅より徒歩11分



「旧廻船問屋 河内屋」は、美々津重要伝統的建造物群保存地区のほぼ中央に位置し、江戸時代に河内伝作によって作られた。

1980（昭和55）年、当時の所有者から市へ寄贈され、復原された現在は、日向市歴史民俗資料館として開館し、全国的に珍しい河口に面した港のある江戸時代の町家をしのぶことができる。

美々津の町は、古くから海の交易拠点としての歴史があり、美々津を経済面から支えたのは廻船業者たちであった。廻船業者たちは、美々津の河口に注ぐ耳川上流で生産された木材や木炭などを大阪方面に向け出荷し、その帰路には、関西方面の特産品や美術工芸品を持ち帰り、文化交流の担い手としての一面もあった。

この建物は、広い間口をもち、通し庇が設けられ、正面には漆喰の塗壁に「京格子」「虫籠窓」などが設けられ、京都や大阪の町家造りが取り入れられている。間口の広さで課税された時代に、これだけの間口をもつことから、美々津でも屈指の廻船問屋であったことがわかる。

見どころ

廻船問屋だけに、船大工たちの手によって建てられた河内屋には、耳川上流で生産された良質な木材が使用され、随所に船大工の技をみることができる。部屋によって天井の高さを変えるなど贅沢なつくりから繁栄ぶりが伺える。

「ざしき」は賓客用の部屋、趣味室として意匠が凝らされ、広い窓からは、中庭の枯山水が見える。枯山水には、石や島の配置によって、三尊仏や鶴亀を表現したり、不老不死の仙人が住むという蓬莱島に見立てたりする石組がある。こちらの石組は、長寿祈願や験担ぎが込められた「亀島」である。（左側が亀の頭）



町人が二階を作ることは「武士を見下ろす」として禁止されていた。

←外観を平家に見せるため二階の天井は低く抑えられ、船底をひっくり返した作りとなっている。



←二階の窓には「虫籠窓（むしこまど）」を設け、外部から内部を見えにくくし外観上は平家を装っている。

＜1階の間取り＞
通り庭をもち「ざしき」「なかのま」「みせ」「土間」が通り庭に沿って2列に配置されている。土間の三和土（たたき）は、貝殻、粘土、石灰で作られ、今では再現不能な貴重なものである。



＜2階＞
1階の天井高が部屋ごとに変わっているため、二階の床高が部屋によって違っている。それにより面白い空間が構成されている。また、窓からは日向灘が見え、気持ちよい風が入り、いつまでも居たい空間でもある。

＜バンコ＞
美々津の建物の多くは、通りに面して「バンコ」と呼ばれる跳ね上げ式縁台が設けられている。開いてイスや台として、たたんで雨よけとして活躍する。



建物名称	日向市歴史民俗資料館/旧廻船問屋 河内屋
建築年	1855（江戸時代 安政2）年
構造・様式	木造二階建・町家
所在地	宮崎県日向市美々津町3244
電話	0982-58-0443
H	P https://www.hyugacity.jp/display.php?cont=140317143907
開館時間	9:00～16:30（休館日：毎週月曜日 年末年始）
アクセス	日豊本線美々津駅から徒歩約25分 宮崎交通バス「立縫の里」停留所から徒歩2分 東九州自動車道日向ICから車で約20分
入館料	大人：220円 こども（小・中・高）100円 団体20名以上2割引
備考	市指定文化財（伝統的建造物）



本館正面（東面）

見どころ

外観が一部洋風になっており全体の和風外観とミスマッチなところがエキゾチックである。休憩スペースは落ち着いたある心安らぐ空間になっている。小屋組みを現わしたギャラリーの吹き抜け天井も見えがえる。



本館南面



土間にある休憩スペース



小屋組を見せた土間の吹き抜け天井

「霧島創業記念館 吉助」は、都城市川東の本社内にあった建物を解体移築したものである。1924（大正13）年の築と言われ、1965（昭和40）年に現在の社屋が建てられるまでは、霧島酒造の前身である川東江夏商店、そして霧島酒造の社屋として使われてきた。表の広い土間は店の売り場で、開業当時は焼酎のほか、米穀や肥料などを扱っていたようである。奥間は主人一家の住居になっていた。移築の際、一部補修、補強等を行なったが、ほとんど当時の材木をそのまま使用していて、大正時代の商家の面影が残っている。



住居部分であった和室の床の間と欄間の風景



廊下（縁側）の様子

和室は田の字式間取りで、連続の部屋になっている。欄間には技術と趣向が凝らしてあり美しい。庭園を眺められる、廊下（縁側）も見事である。縁側の奥にはこの建物唯一の洋間があり、基天井造りである。

奥の住居部分は一般開放はされておらず、和室は土間から眺める。日本を代表する女性棋士による将棋の棋戦、「霧島酒造杯 女流王将戦」もこの記念館特設会場で開催されている。



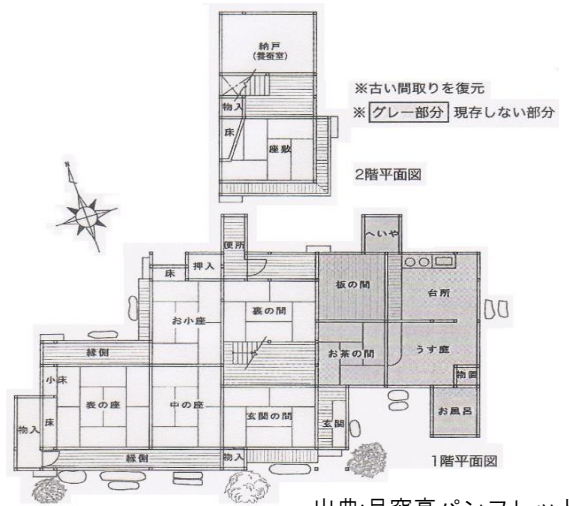
縁側奥にある洋間の基天井

本建物は霧島ファクトリーガーデン内にあり、他にも霧の蔵ブルワリーやベーカリー、ミュージアムの他、霧島焼酎神社、等もある。

建物名称	霧島創業記念館「吉助」
建築年	1924（大正13）年
構造・様式	木造平屋・入母屋造
所在地	宮崎県都城市志比田町5480 霧島ファクトリーガーデン敷地内
電話	0986-21-8111
HP	https://www.kirishima-fg.jp/kichisuke
開館時間	9:00～17:00
アクセス	都城インターチェンジより車で15分 駐車場有
備考	



建物外観



出典:月窓亭パンフレット

見どころ

種子島の武家屋敷は基本的に玄関がない。月窓亭の玄関も狭く質素な造りである。またこの部屋で刀を振り上げることができないよう天井を低くしている。このことは天井が高い奥の間を広く見せる効果もある。種子島の気候に適した建材として、硬質で湿気やシロアリに強い性質を持つ種子島産「ひとつ葉の木」（イヌマキ）が使用されている。

月窓亭は1793（寛政5）年、種子島家家老職を務めた花道師範家・羽生道潔（はぶみちきよ）が27歳の時に建造した建物。孫である慎翁（しんのう）は、梅陰亭月窓（ばいいんていげっそう）と号し、1882（明治15）年池之坊大日本総会頭職を務め、池之坊を全国に広めた。この住宅は慎翁が花道修行を行った屋敷である。慎翁の生活が東京中心となった為、種子島家旧家臣団の要請をうけた27代種子島守時公がこの屋敷に移住した。以来この屋敷は「お屋敷」と呼ばれ、種子島の誇りとして人々の心の拠り所となった。



南側外観



石垣



門

月窓亭は台所部分が欠損しているものの、赤尾木城にほど近く、風格、書院の造りなどが優れている武家屋敷である。種子島は武家社会南限の地であり、さらに珊瑚塊を積み上げる石垣文化の北限。門構えや屋敷、庭園などに種子島の独自性があるが、概して薩摩武家文化の様相を呈している。



2階座敷より



玄関の間



縁と表の座



東側外観（玄関）



2階座敷

建物名称	赤尾木城文化伝承館 月窓亭（種子島邸）
建築年	1793（寛政5）年
構造・様式	木造平屋一部二階建、瓦葺
所在地	鹿児島県西之表市西之表7528
電話	0997-22-2101
H P	http://gessoutei.blogspot.jp/
開館時間	9:00～17:00（毎月25日休館・7,8月無休）
アクセス	西之表港から車で5分 駐車場あり
備考	西之表市指定有形文化財



建物外観

見どころ

修理前は瓦葺であったが、復原調査の際、母屋の桁から茅葺であったことを示す「サス穴」の痕跡が確認され、母屋は茅葺屋根に復原されている。茅葺を支えるダイナミックな小屋組や、復原工事の際用いられた「金輪継ぎ」等の伝統的技法は、当時の建築技術の高さを今に伝えている。



小屋組



金輪継ぎ



釘かくし

漆器類

敷地は延命院跡と伝えられ、1867（慶応3）年に寺子屋が開かれたが廃仏毀釈により、寺子屋は現在の入来小学校の地に移されている。屋敷入口にある石敢当の刻銘から、母屋は1873（明治6）年までに建築されたと考えられており、構造材の一部には、延命院の部材を転用したと思われる痕跡を残している。別棟型民家として「おもて」と「なかえ」を「樋の間」で繋ぐ形式など、随所に武家住宅としての特徴がみられる。建築主は代々、眼科医を営んでおり、この建物でも治療を行っていた時期があった。2009（平成21）年度、市が土地と建物の寄贈を受け、2010（平成22）年度から3カ年をかけて保存修理工事を実施した。2014（平成26）年12月、重要文化財（国有有形文化財）の指定を受ける。



石蔵



浴室便所

【おもて】

主として接客空間として使用され、主人が普段生活する場である。建築主は眼科医を営んでいたため、当時は診療の場でもあった。

【樋の間】

竹を組み合わせた樋で、棟と棟を繋ぐ空間である。床は板張りで、それぞれの棟の雨水を竹樋で受けて流している。

【なかえ】

居間兼食堂として使用され、炊事等を行う土間があり、かまどなどが置かれていた。隣接する洗い場には、清色城跡の土居の湧水を、竹で水場へ引いた痕跡を残している。



おもて

樋の間



なかえ

洗い場

建物名称	旧増田家住宅
建築年	1873（明治6）年頃
構造・様式	木造平屋、寄棟造、茅葺
所在地	鹿児島県薩摩川内市入来町浦之名77
電話	0996-44-4111
H P	http://satsumasendai.gr.jp/spotlist/21641/
開館時間	9:00～17:00（月曜休館）※入館16:30まで
アクセス	JR川内駅からバスで45分「入来麓」下車 徒歩5分
備考	重要文化財（国有有形文化財）



建物外観

敷地は江戸末期、重富島津家（篤姫の母方）の上屋敷跡である。建築主である藤武呉服店・藤武喜助氏が、宮大工・瀧之上喜助氏と3年ほどをかけて建築。1939（昭和14）年、自邸として竣工する。戦後は料亭や宿泊施設として使用されていた時期がある。1981（昭和56）年には、初代所長・椋鳩十氏を迎え「鹿児島県民教育文化研究所」が設立された。外観と庭園は純和風、内部は床の間を備えた書院造りの和室から、暖炉を据えたアールデコ様式の洋室まで多様な造りとなっている。2013（平成25）年12月、家屋と土蔵が文化庁登録文化財の指定を受ける。



庭園



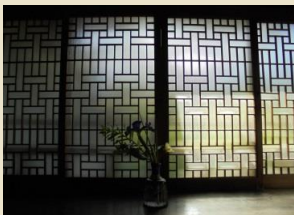
中庭

見どころ

素材の面白さを活かし、形式にとらわれない「数寄のこころ」を随所の納まりに見て取ることができる。建築主である藤（富士）と武（竹）にかけたモチーフが、欄間やガラス細工など随所にちりばめられている。見るたびに新しい発見がある。



曲木細工



格子窓



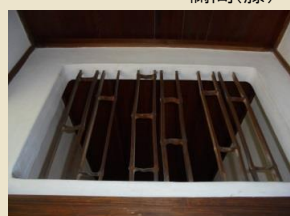
竹細工



欄間(藤)



ガラス細工(富士)



欄間(竹)

【玄関】

看板文字は初代所長・椋鳩十氏の書。

玄関の間をぬけると、クスノキの繊細な寄木細工床が迎える。

【応接室】

暖炉を据えたアールデコ様式の応接室と、モザイクタイルを敷き詰めたサンルームからなる。戦後、ダンスパーティ等にも使用。

【表座敷】

長押を配し、床の間や書院棚を備えた書院造りの14畳と10畳の続き間の和室。続き間部分は、2間半の柱間をもつ大空間である。



玄関



寄木細工床



暖炉



サンルーム



モザイクタイル



表座敷

建物名称	鹿児島県民教育文化研究所
建築年	1939（昭和14）年
構造・様式	木造平屋一部二階建、瓦葺
所在地	鹿児島県鹿児島市春日町4-60
電話	099-247-4514
H P	
開館時間	9:00～16:00（日曜・祝日休館）※入館15:30まで
アクセス	鹿児島市営バス「大龍小学校前」下車 徒歩3分
備考	国登録有形文化財 ※見学時要連絡



中村家住宅は戦前の沖縄の住居建築の特色をすべて備えている建物である。

現存する建物は18世紀中頃に建てられたと伝えられ、建築構造は、鎌倉・室町時代の流れが見えるが、各部に特殊な手法が加えられている。屋敷は南向きの緩い傾斜地を切り開いて建築している。



魔除けシーサー

見どころ

沖縄本島内でこのように屋敷構えが当時のまま残っている例はきわめて珍しく、上層農家の生活を知る上にも貴重な遺構であるということで、昭和31（1956）年に琉球政府から、昭和47（1972）年には日本政府によって国の重要文化財に指定された。沖縄の気候に適した、先人たちの知恵が詰まった住宅である。

中庭と縁側（雨端：アマハジ）、そして和室へと流れる沖縄の南風を感じてもらいたい。

【ウフヤ（母屋）】

一番座（客間）、二番座（仏間）、三番座（居間）となっている。裏には各一間ずつ裏座があり、寝室や産室として使用された。畳間は、すべて六畳かそれ以下で、当時の農民にはその大きさしか許されていなかった。



三番座（居間）



二番座（仏間）



一番座（客間）



【アシャギ（離れ屋敷）】

当時、近くの中城間切（現在の中城村と北中城村）の番所へ、首里王府の役人が地方巡視に来た際に、宿泊所として使用したようである。軒裏で建物の仕上げが異なり、アシャギ（離れ屋敷）は、木板で仕上げられている。ウフヤ（母屋）は葺き土の下地に竹をそのまま施している。軒裏の仕上がりで位を表している。

建物名称	中村家住宅
建築年	18世紀中頃
構造・様式	木造平屋
所在地	沖縄県中頭郡北中城村字大城106
電話	098-935-3500
H P	https://www.nakamurahouse.jp/
開館時間	9:00～17:00（水曜、木曜休館日）
アクセス	沖縄自動車道 那覇ICより15分
備考	国指定重要文化財